サムスのヒーローアカデミア

プリズ魔X

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男はサムスに憧れた。そして人生をの全てを使いパワードスーツを作った。

……しかし、その男はある時失意のまま死んでしまう。そして目が覚めると……

メトロイドプライム要素は微粒子レベルで出ます。……嘘ですちょっと出ます。

目次

目覚め ―― 1
入試試験　前編 ―― 6
入試試験　後編 ―― 11
相棒との出会い、そして入学……20
個性把握テスト ―― 29
戦闘訓練 ―― 38
戦闘訓練（蹂躙） ―― 47
マスコミ突入！ ―― 56
人命救助訓練 ―― 69
敵連合と闖入者 ―― 74
仄暗いフェイゾンの底から ―― 84
個性　ダークサムス ―― 93
E・M・M・Iルームでの特訓　前編 103
E・M・M・Iルームでの特訓　後編 108
波乱の雄英体育祭開催 ―― 117
障害物競走 ―― 124
騎馬戦　メンバー選択 ―― 130
乱戦で大混雑の騎馬戦　前編 ―― 138
乱戦で大混雑の騎馬戦　後編 ―― 142
見えざるサムス　前編 ―― 147

目覚め

「……遂にあのスーツを着る事も無いまま一生を終えるとはな。だが、誰かが継いでくれるだろう……」

とある病室で男はそう呟き、静かにその一生を終えた……筈だった。

「おんぎゃあ！おんぎゃあ！おんぎゃあ！」
「おめでとうございます！元気な女の子ですよ！」
（……は？）
「そうね……この子はサムス。サムス・アランよ！」
（……サムス・アラン!?）

ヒュウウウウ……

「きっと風が気持ちいいのだろうな……」

貴方達は前世、というものを信じるだろうか?私は信じる。というか信じざるを得ない。私はメトロイドというゲームのサムスという人物のパワードスーツにロマンを感じ、それに人生を費やし、そしてノーマルスーツの完成の目処が経った所で持病の心臓病が悪化してしまい、この世を去った。そして気づいたら、驚くかもしれないが、サムス・アランとなっていた。最初はメトロイドの世界だと思っていたが、そこには個性という能力をもつ人間がほとんどの言わば超人社会の世界であった。

私の義父によると私は生まれて間もなく命の危機に晒された。

それは突然変異により発生した寄生生命体『X』の寄生によって起きた。医者からはどんな治療方法もダメだと諦めかけていた時、そこに救世主が現れた。私の今の義父の1人であるレイヴンビークにメトロイドワクチンという物質を打ち込まれ、Xはそのワクチンによりこの世界から消滅した。しかし、レイヴンビークはワクチンを打つ条件として私を引き取らせてほしいと言ったそうだ。

どうせ死ぬのならば引き取らせても構わないと両親は決断。私はレイヴンと共に日本へ住むこととなり、そして今に至る……が、代償として私の身体はパワードスーツで覆われる事となった。もしXが再び現れた時に戦えるようにと。しかし、スーツは未だ未完成。……いや、これは少し意味が違うな。まだデータ不足が正しい。今はレイヴン（レイヴンビークの愛称として私が呼んでいる）達が『モーフボール』と『ミサイル』のデータを作成中だ。今、達と呼んだ理由はもう1人、クワイエットローブというもう1人の義父である人物がいるからだ。レイヴンはこの世界のメジャーな職業であるヒーロー、そしてそのサポートをクワイエットローブがしている。そして私が中学3年の時にレイヴンがある相談を持ちかけて来た。

「サムス、雄英に入らないか？」
「雄英？雄英ってあの……」
「そうだ。そこのヒーロー科に入るのはどうだ？何せ俺とクワイエットローブが作ったそのスーツははっきりいってオーバーテクノロジーもいいところだからな。あれを学校でメンテナンスできるかもしれない技術者は雄英ぐらいしかいないだろう。」
「……わかった。私、雄英を目指すわ。」
「よし、早速の所悪いが訓練だ。雄英は実技試験もある。基礎は俺が叩き込む。……死なない程度にしごいてやるから覚悟しろよ？」
「モーフボールとミサイルはどうするの？」
「クワイエットローブに任せて完成次第訓練に組み込む。訓練室に行くぞ。」スタスタスタ……

「ローブ義父さん……大丈夫かな？」

入試試験　前編

「ふぅ……筆記は大丈夫そうだな。実技でよくて筆記で落ちたらレイヴンに叱られるどころじゃない。さて、実技試験の会場へ向かわないとな。」

私は今雄英の筆記を終えて実技試験の会場へと向かっている。年によって実技内容は変わるらしいのでとりあえず基本的なレスキューと戦闘をレイヴンに叩き込まれた。……正直装備がバリアスーツも無いような不十分な状態のまま戦い抜いた私自身に賞賛を送りたい。だってレイヴンに一切ダメージが通らないのだから。そのくせこっちは何を食らっても致命傷だ。何だこのクソゲーってレイヴンに毒づいたらこんな理不尽はありふれていると一蹴された。解せぬ。

「ここが実技試験の会場か。」

「そこの君！その姿はなんなんだ!?制服を着てこないとは何事なんだ！」

「ん？君は……」

「おっと、紹介が遅れてしまった！ボ……俺の名は飯田　天哉！私立聡明中学の者だ！」

「天哉君だね？私の名はサムス。サムス・アランだ。このスーツはとある科学者によっ

て装着されたバイオ素材で出来たもので、既に私の身体の一部となっているんだ。だから着脱は出来ない。それに、予め雄英側に許可は貰っているから安心してくれ。」
「成程……すまない！俺は勘違いをしていた！」
「いや、構わない。よくそうやって間違われるからね。慣れている。それに、この姿は私自身も気に入っているんでね。」
「そうか……おっと！急がないと遅れてしまう！すぐに向かおう！」
「ふむ。そうだな。」

『今日は俺のライブに来てくれてありがとーー!!Ｅｖｅｒｙｄａｙ　Ｓａｙ　Ｈｅｙ

？』

シーーーーン……

『こいつはシヴィーーー!!』

（ちょっと可哀想だな。次は声をかけてあげよう。）

『これから実技試験の内容を説明するぜ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

「オッケーイ！」「サムス君!?」

『んん～！ちょっと発音が違う気がするがそこのスーツのリスナー！お返事ありがとな～！』

「こうやって励ますのもヒーローの仕事なので。」

『おお！確かにそうだな！お前は見込みがあるかもな！でも油断はするなよ？』

（成程……サムス君はそれを見越して返事をしたのか！……俺はまだまだ未熟という訳か！）

『試験内容は至って単純！会場にいる仮想敵をしばいてポイントを多く獲得する事だ！仮想敵の種類は１Ｐｔ、２Ｐｔ、３Ｐｔの３種類を倒せばいいぞ！ここまで何か質問はあるか？』

「質問よろしいでしょうか！」

『おっ！いいぜ！なんだ？』

「配布されたパンフレットには四種の仮想敵が記載されています！もしこれが誤った情報でなければ説明してもらいませんか？」
『おっ！ちょうど説明しようと思っていた所だ！四種目は０Ｐｔだ！いわゆるおじゃま虫だな！倒しても０Ｐｔだし、めちゃくちゃ強いから逃げるのが賢明だぜ？』
（あの話し方だと一応倒せるように設計されているみたいだな。レイヴンや『サムス』ならきっと見逃さずに倒しにいくだろう。）

「ありがとうございます！それと……そこの君！さっきからボソボソと……集中するのもいいができるなら周りに迷惑をかけないように気をつけたまえ！」
「！　は、はい！」
「天哉君。少々言い過ぎではないかな？かえって緊張させてしまうと思うのだが。」

「そうだろうか……しかし、周りに迷惑をかけさせる訳にはいかないだろう？彼の為にもだ。」
「……まぁ、それも１つの答えかもしれないな。」

『さぁ！最後に我が校の校訓を伝えよう！かの英雄、ナポレオン・ボナパルトはこう言った……『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越える者の事だ』と！さらに向こうへ！……Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ!!』

入試試験　後編

「む。天哉君とは別の会場のようだな。では、雄英でまた会おう。（入らないとレイヴンに殺される……）」

「あ、あぁ……（とてつもない自信だ……やはり彼とは格が違うのではないか？）」

「ノーマルスーツでどこまで行けるか……」

「はい、スタート。」
「！」ダッ！
『ほらほら！もう試験は始まってるんだ！もうスーツの奴は動いて仮想敵を倒しに行ってるぞ！』
「い、急げーー！」ダダダ……

「アームキャノン展開。さて、どこに仮想敵はいる？」
『標的捕捉！ブッ殺ス！』ブゥン！
ピカッ！（ここだ！）ガキィン！

「トドメだ！」ビュウン！

ＢＯＭＢ！『ガガガ……ピー……』

私は１Ｐｔの仮想敵の頭部を正確に撃ち抜き行動不能にした。どうやら見た目よりずっと脆いし、この強さではどれだけ束になってもレイヴンや『サムス』には鉄クズに変えられてしまうだろう。

『危険対象確認！集結セヨ！』ビー！ビー！ビー！

「集まってきたか。とりあえずこの３Ｐｔを撃ち抜くべきだな。」ビュウン！

『標的』『標的』『標的』『捕捉』『捕捉』『捕捉！』『ブッ殺』『ブッ殺』『ブッ殺ス！』

仮想敵が私の周囲に殺到して私は囲まれてしまう。

『『『『『『攻撃開始！』』』』』』』ボシュウ！

仮想敵は一斉にミサイルを放つが……

「モーフボール、オンライン。」カシャ……

『『『『『!?　回避不可！』』』』』

ドオオオオン！

サムスにはそんな単調な攻撃はモーフボールで避けられてしまう。回避されるのを想定していなかった仮想敵達は自滅してしまい、彼女のポイントとなった。

「やはりチンピラの相手の方がマシだな。さて、続きだ。」タッタッタッ……

「大丈夫か？動けないなら肩を貸す。」スッ……
「す、すまねぇ……」
「なに、ヒーローというのはボランティアが本質さ。それに、人助けをしなくてはヒーローではないと父は言っていた。」
「そうか……ありがとな。助けてくれて。」

「よし、来たな。ＯＰｔ。」

ゴゴゴゴゴゴ……

「弱点は何処だ……？」ビュウン！ビュウン！

『……』ガキィン！ガキィン！

「前面装甲は堅固で今のビームでは貫けないか。なら関節部はどうだ？」ビュウンビュウン！

「む。関節部も補強されていて効かないな。動力部も装甲に隠されて狙えない。……残す所は頭部か。おっと、そんなのろい攻撃は当たらないな。こんなのに当たったら恥だな。レイヴンはもちろん、クワイエットローブでも避けられる。」

『……』ブゥン！

「何度も同じ攻撃をして当たるか！」ヒョイ！

ＯＰｔ仮想敵はサムスに対して腕を振るうが、サムスが回避したことで地面に腕が突

き刺さり動けなくなってしまう。それを見逃すサムスではない。サムスは腕に飛び乗り頭部に登りカメラを破壊する。

『!?』

ＯＰｔ仮想敵は混乱する。唯一のセンサーであるカメラ部分は非常に脆くできており、簡単に壊れてしまった。サムスはその隙にパワードスーツの引き出す怪力で上部の装甲を引き剥がし、剥き出しの回路を撃ち抜き、今度こそＯＰｔ仮想敵の動きを止めた。

「さて、まだ時間が余っているな。残り時間は救助に回そう。」タッタッタッ……

「ありがとう……」
「問題ない。」
『しゅーーりょーーーー!!!』
「ふぅ……受かっているといいんだがな……」

モニタールーム
「さて、今年もとてもいい収穫があったね！」
「特に見るべきなのは1位、2位、8位の子ですね。その中でも1位の子は規格外ですね。我々プロヒーローにも劣らない動きをしている。」

「2位の子は言動に問題あり、8位の子は最後以外は全てダメダメですね。1位の子に関しては不気味すぎるほど洗練された動きです。」
「……彼はアングラ系ヒーロー、レイヴンビークの養子なんだ。レイヴンビーク本人からこのスーツの着用許可を要請されてね。どうやら着脱不可だから許可したのさ！」
「このスーツは個性ではないのですか!?」
「中身の子の個性も気になるわね……」
「彼女は一応無個性として登録されているのさ！だけど、ある事件で他の無個性とは一線を画しているのさ！」
「ある事件？」
「アメリカにいたオールマイト君なら知っているんじゃないかい？……寄生生命体、『X』の被害者であり、唯一の生存者なのさ。……彼女以外の寄生された人物は全て死亡。彼女に投与された『メトロイドワクチン』によりX自体の殲滅はされたものの、未だにXに対抗できるのは彼女だけなんだ。」
「まさに切り札ですか……動きはそのレイヴンビークが？」
「……凄まじい動きですね。壁をパワードスーツありとはいえ跳躍して、さらに球体状

に変形できるみたいですね。これを使い狭い所を通るのも可能ですか……」
「あぁ、パワーローダー君に報告というか警告なんだけど、このモーフボールという技術は模倣しないで欲しいとの連絡なのさ。理由は模倣した技術でのモーフボールは着用者の背骨をへし折ってしまうからするのはデータにバグが無いかのメンテナンスだけして欲しいとの事さ!」
「了解しました。被験者を殺しかねない技術を模倣する気はありません。」

相棒との出会い、そして入学……

「遂に届いたな。」
「ああ。じゃが、サムスなら受かっているとも。」
「一応レイヴンから教えられた事は全てこなしたが……」
『私が投影されたァ!!』ブゥン！
「……誰だ？」
「戦いばかりしているからじゃよレイヴン。彼はオールマイト。平和の象徴と呼ばれているＮＯ．１ヒーローじゃ。」
「見た所脳筋タイプだな。顔面にミサイルを連打すれば勝てるか？」

『ＨＡＨＡＨＡ！驚いているかな？今年から私が教鞭をとることになってね！こうして今ここにいるんだ！……え？もう次がつかえてるから巻きで？……オホン！』
「ふん。ＮＯ．１とやらももう引退の頃合という訳だな？余程次代の象徴が欲しいと見た。」
「レイヴン……」

「まぁ、レイヴンの言葉も一理あるな。わざわざ教鞭をとるのには理由があるはずだ。」
『さぁ！サムス少女！まずは筆記試験の成績の発表だ！……結果は問題なし！むしろ上位の好成績だ！お次は実技！敵ポイント５３Ｐｔで２位だ！』
「……２位だと？仮想敵を倒すだけなら誰でもできる。なにかあるだろう。」
「だといいのじゃが……」
「２位か。１位の奴との差が少し気になるな。」
『ただし！ヒーローというのは人助けも重要だ！……そこで！隠しポイントとしてレスキューポイントをこっそり採用していたんだ！……サムス少女のレスキューポイントは０Ｐｔ撃破での危機を事前に止めたことで３０Ｐｔに、６人のレスキューで１５Ｐｔで４５Ｐｔ！合計９８Ｐｔで１位の子を追い越して首席合格だ！……ようこそ！明日からここが君のヒーローアカデミアだ！』ブツン！
「ふん。当たり前だ。私が鍛えたサムスが首席になるのは確定していた事だ。」
「レイヴン。内心焦っていただろう？わしも少々ヒヤヒヤさせられたが。」
「む。首席か。なにかあるのだろうか……」

研究室

「ローブ。今夜で間に合わせるぞ。」カタカタ……

「分かっておる。サムスにはわしらなりのささやかな合格祝いを送らねばな。」カタカタ……

「サムス。荷物は全てスーツに収納したか？」
「問題なしだ。レイヴン、ローブ。……ところで合格祝いのプレゼントはなんだ？」
「これだ。今送信する。」ピッピッピッ……
そう言うとレイヴンはアームキャノンを展開してなにかを打ち込み送信して来た。

『……データ移送完了。はじめまして。サムス・アラン。』
「……これは？」
「サポート高性能ＡＩ、『アダム』だ。パワードスーツの強化データの送信と君の戦闘サポートをしてくれる。」
『そういうことだ。異論はないな？レディー。』
「あぁ。無い。」

「早速チャージビームの送信でテストするぞ。」ピッピッピッ……
『データ受信中……チャージビーム、ダウンロード完了。さぁ、雄英に向かうぞ。』
「あぁ。……レイヴン、ローブ。行ってくる。」タッタッタッ……
「行ってこい。そして格の違いを見せつけてやれ。」

「……行ってしまったな。」
「なに、またすぐに帰ってくる。」
「……少々不安ではあるな。サムスが振り回されないか。」
「……大丈夫じゃろう。多分。」
「多分とはなんだ！多分とは！」

「ここが雄英だな。やはり大きいな……」
『マップデータ更新中……更新完了。これで迷子はしないだろう。』
「む！サムス君か！やはり受かっていたんだな！」

『……誰だ。』
「飯田　天哉だ。受験の時に会った。」
『飯田　天哉のデータ照合中……』
「？　一体誰と話しているんだ？」
「アダムというＡＩを今日ダウンロードしてもらったんだ。私のスーツはモジュール式だからデータを送信してもらって強化していくんだ。」
「成程……ＡＩか。」
『……照合完了。飯田天哉。個性は『エンジン』で、インゲニウムとは家族である。』
「！」
「……アダム。勝手に情報を漁るな。失礼だろう。」
「……バレたか。俺の兄はターボヒーロー、インゲニウムだ。」
「……プロヒーローが家族なのか。私と同じだな。私はチョウゾヒーロー、レイヴンビークが義父だ。」
「レイヴンビーク？知らないな……」
『レイヴンビークは基本的にファンサービスなどを一切しない。基本的に声援等は無視するタイプであまりヒーローとして認知されていない。いわゆるアングラ系ヒーローというものに分類される……どうやら我々の担任はイレイザーヘッドというこれまた

アングラ系ヒーローに当てはまる人物のようだ。個性は……データ無し。恐らく知られると対策されてしまう個性と推測。』

「そこまでだ。アダム。……さぁ、行こうか、天哉君。」

「あぁ。同じA組のようだしな。」

「……ふむ、大きな扉だな。」

『中に生命反応が一つだけある。どうやら1番ではないようだ。』

ガラガラ……

「……いないぞ。誤作動……ではないな。教壇側に反応があるな。」

「生命反応まで分かるのか……凄まじい性能のスーツだ。それを使いこなしているサムス君はやはり凄い……！」

「……寝袋？……！　動くな！」スチャ！

「……ん？あぁ、安心しろ。お前らの担任だ。だからその物騒なもんを下ろせ。」

「アダム、データ照合しろ。」

『……彼は間違いなくイレイザーヘッド本人だ。写真の一致率１００％。』

「……ＡＩ？」

「朝に装備を更新しました。既に雄英側のデータベースに登録してあります。」

「俺はここで寝ていたから知らん。……さて、この騒いでいる奴を黙らせるからお前も座れ。」

「……お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここは……『ジュルル！』ヒーロー科だぞ。」

「……はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠けるね。」
「担任の相澤　消太だ。よろしくね。」
「早速だが、そこのサムス以外はこれ着てグラウンドに集合。サムスがスーツを着ている理由は後で本人に聞け。はい、駆け足。」
「サムス。スーツの能力は全て使って構わない。」
「？　分かりました。」

個性把握テスト

「個性把握テストォォォォ!?」
「入学式は!?ガイダンスは!?」
「そんな悠長なことはヒーローになるには不要なものだ。時間は有限。」
「さて、お前らは中学の時に体力テストを個性ナシでやったろ?あれを今回は個性の使用を許可する。……これは画一的なデータを取ろうとしている文部科学省の怠慢だよ。」
「……私は無個性ですが。」
「「無個性（だと）!?」」
「サムスはスーツの性能試験と思ってやればいい。んで、お前が首席だから最初にやれ。はい、ソフトボール。」ポイッ
　パシッ「……アダム、最適なコースを計算してくれ。」
『了解。……計算完了。バイザーに表示する。』
「よし……はぁっ!」ブゥン!
「……記録、３８６９ｍ。……お前本当に無個性なのか?」

「……残念ながら。」
「4キロ近くってまじかよ!?」
「流石は雄英高校ヒーロー科！」
「あいつホントに無個性か？」
「けっ！スーツの性能のおかげだろ。」
「なにこれ！面白そう！」
「……お前ら、そんな呑気な感じでコレを受ける気か？……よし、トータル成績が最下位の者は除籍処分としよう。」

「「「……はあぁぁぁぁぁ!?」」」
「そんな！理不尽にも程があります！」
「じゃあ逆に聞くが、君たちはヴィランという理不尽極まりない奴らから逃げるというのか？ここの校風は自由。生徒をどうするかも自由さ。お前たち、除籍処分にされたくないなら全力でやれ。プルスウルトラの精神だ。」

「……レイヴンの訓練よりはマシだな。」ボソッ
「何か言ったか？」

「いえ、何も。」

５０ｍ走

「サムス、お前は上体起こし以外は全て１人でやる。１人余るからな。」
「分かりました。」
「よーい、スタート！」パン！
「……」タッタッタッ……
「記録、２秒８。」
「やはり負けたか……」
「最速じゃねぇか!?」
「無個性の癖に……！」
（凄い……スーツの性能の高さに隠れがちだけど、それを使うサムス君もとてつもない努力をしたんだろう……！やっぱり僕なんかじゃ……）
「……アダム、最速の予測タイムは。」
『２秒３だ。コンマ５秒の誤差となっている。』
「やはり向かい風がネックだったか……」
「あれで最速じゃないのか!?」

握力

「……」ベキ！

『強度不足と判断。更なる強度の握力計を要求する。』

「それで限界だ。計測不能とする。」

「……まじ？」

「あんな軽々とへし折るなんて……」

「クソが！」

「あんな細身で万力以上のパワーを出すなんて……！」

立ち幅跳び

『サムス。ボムのデータが送信された。ボムジャンプの使用を推奨する。』

「了解だ。モーフボール、オンライン。」カシャ……

ボン、ボン、ボン、ボン、ボン、ボン、ボン、ボン、ボン……

「……記録、無限。」

「無限!?」

「なんかシュール……」
「空飛ぶダンゴムシ……」
「……人間ロケットみてぇに飛べば記録を伸ばせるか……？」
反復横跳び
「クソっ、もう少し重力が高ければ安定するのだが……」
『重力ルームでの訓練が仇となったな。レイヴンビークに報告する。』
「記録、２００。」
「オイラの……記録……」

長座体前屈
「……これが限界だ。」
「……まぁ、あんな小さなボールになれるんだから柔らかいよな……」
記録　１００ｃｍ

上体起こし
「……」ウィンウィンウィンウィン……
「全く息切れしないなんて……」

「記録、１００。」

持久走

「……」タッタッタッ……

「なんでバイクより速く走れますの!?」ドドド……

「訓練。」タッタッタッ……

（訓練か……俺も受けるべきだろうか。）

「……地獄だぞ？何百倍もの重力の中で戦闘訓練をするのだからな。人によっては潰れる。」

「もう訳が分かりませんわ……」

「よし、記録発表……の前に、ひとつ連絡だ。除籍処分は撤回する。」
「……えぇぇ!?」
「あれは君たちに本気を出させる為の合理的虚偽だから。」
「あんなのすぐに嘘だって分かりますわ……」
『それは違うぞ、レディー。スキャンによると、彼は嘘を吐いている。』
「え?」
「……やはり機械にはバレたか。そうだ。俺は見込みなしと判断したら1位だろうが除籍処分にするつもりだった。」

「……アダム、何でもかんでも言えば良い訳ではない。」
『善処している。だが、今回は言うべきだったと判断した。』
「はぁ……すみません、このＡＩが少々おしゃべりだった様です。一応帰ったらメンテをかけておきます。」
『私は正常だ。』
「それは自己診断だろう。」

「相澤君のうそつき！」
「俺は見込みが全員あったから撤回したにすぎません。見込みがあるのに嘘を吐いて除籍処分にすればそれこそ非合理的です。」
「……しかし、あれはどう見てもオーバーテクノロジーだ。あの性能のスーツは私のコスチュームを作ったデイヴでも再現出来ないだろう。」
「いえ、あれはまだ発展途上の様です。」

「……これ、私勝てるかな……」

戦闘訓練

「……」
「なぁ、あのスーツは一体……」「個性かな……」「制服を着ていないのはどうなのかしら。」
「そこの君！なんで制服を着ていないんだい？」
「む？あぁ、これは着脱不可のスーツなんですよ。」
「そうなのか！勘違いしてすまなかったね！」
『スキャン開始……スキャン完了。通形ミリオ、雄英高校の３年生で、個性は透過。』
「スーツが喋った!?」
『厳密にはスーツにダウンロードされたＡＩだ。アダムと呼称されている。』
「では通形先輩、これからヒーロー基礎学なので。」
「あぁ、呼び止めてごめんね？」

「わーたーしーがー……普通にドアから来た！」
「オールマイトだ！」
「あれは銀時代（シルバーエイジ）のコスチュームね。」
「画風が違くて鳥肌が……！」
「アダム。彼と戦闘した場合の勝率は。」ボソボソ
『ほぼゼロパーセントだ。現状の攻撃は彼に効かないだろう。』
「レイヴンならどうだ？」ボソボソ
『９９％だ。彼が体内エネルギーの全てを使って人間爆弾にでもならない限り彼の勝利は無い。』
　私はバイザーの消音機能をＯＮにしてアダムにオールマイトと戦った場合の勝率を聞いた。帰ってきた答えは火力不足だ。やはりバリアスーツがないことによる紙装甲もそうだが根本的な解決方法は装備のアップグレード待ちというのは課題だな。

「着替えたらグラウンドβに集合だ！」
「……ん？」
「どうしたんだ？」
「……いや、なんでもない。」
「？」
『サムス。君の左手にアップグレード機能をダウンロードした。君の意思で対象の能力を吸収できるようになった。随時使ってくれ。』
「吸収機能か……上手く使えば現状の火力不足を打破できるか？」

「さぁ有精卵共！訓練の時間だ！」
「先生！ここは入試の試験会場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか!?」
「いや！今回はもう二歩先に踏み込む！屋内での対人戦闘訓練だ!!ヴィラン退治は大抵屋外で見られるが、統計によると屋内の方が凶悪なヴィラン出現率は高いんだ！監禁、軟禁、裏商売……このヒーロー飽和社会！…っと、失言だったね！真に賢しいヴィランは闇に潜む！君らにはこれから、ヴィランチームとヒーローチームに分かれて二対二の屋内戦を行ってもらう！」
「基礎も無しにやるのですか？」
「その基礎を学ぶ為の実践さ！ただし！今回の訓練ではロボットを鉄クズに変えればいい訳じゃない！」
『１０点』
「勝敗のシステムはどうなります？」
「ブッ飛ばしてもいいんスかァ？」
「また相澤先生みたいな除籍とかあるんでしょうか……？」
「分かれるとはどの様な分かれ方をすればよろしいのですか！」
「一人余るんですけどそれはどうすれば……？」
「このマントヤバくない？☆」

「んんん～聖徳太子ィィ!!!!あと１０点は傷つくからね!?」
「アダム、ステイ。」
『私は犬ではない。』
「えーっと……　状況設定は敵ヴィランがアジトの何処かに核兵器を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている！ヒーローは時間内に敵ヴィランを捕まえるか、核兵器を回収する事。敵ヴィランは制限時間まで核兵器を守るか、ヒーローを捕まえる事だ！」
『カンペを読んでいたら説得力が無くなる。５点減点。』
「ひどい！」
「アダム……」
『私は事実を言っているに過ぎない。』
「チーム及び対戦相手の決め方はくじ引きだ！あと、このクラスは２１人だからサムス君は特別に指名をしてＯＫだ！」
「それは必要ありません。オールマイト。既に２人います。そこに私を倒したさそうな２人が。……あと、味方ならアダムがいるので。」
「けっ！随分と余裕だな！」「……」
「なんなら私はオールマイトの相手をしてみたいのだが……」

「「それはずるい！」」
「そ、そうか……」

『……コレをやる位ならレイヴンと戦う方が有意義な時間だ。』
「出来ればレイヴンとは戦いたくない。……いつもいつも容赦が無さすぎるんだ。勝ち目を与えないで何が訓練だ……」
『……回避とカウンターの訓練にはなる。』
「その間で答えに時間がかかっているのがバレバレだ。」

「さて！最後にサムス君対爆豪少年に轟少年の訓練といこう！」

「あのスーツ野郎……ぶっ殺してやる……！」
「……俺が凍結させる。そのあとはお前に任せる。お互い連携は難しいだろうからな。」
「てめぇの没個性ごときの攻撃なんざ簡単に利用できるわ！舐めんじゃねぇ！」
「……」
「なんか言えよクソが！」
　そんなやり取りを隠れていたサムスは屋上から監視していた。

「……アダム、スキャンを。」
『爆豪勝己、個性は爆破。性格に難あり。戦闘センスはサムス、君に匹敵する程高い。応用のできる個性だ。何が来ても大丈夫なように注意せよ。』
『次に轟　焦凍。個性は半冷半熱。しかし、炎を使用した痕跡が少ないため、攻めるなら炎の個性を使う右側から攻めるべきだ。』

『……レイヴンから通信。バリアスーツのデータが完成した様だ。』
「バリアスーツ？確かミサイルが先に完成間近だったはずだ。」
『ミサイルのデータにバグが見つかったため、至急バリアスーツのデータを完成させたようだ。データを受信中……』
「そうか……　　!!」
　アダムがそう言うや否やサムスのスーツが淡く輝き、オレンジと白の装甲、そして金色にも見える筋繊維状のパーツへと変貌した。
「これで熱は防げるな。」
『だがまだ冷気は防げないから注意しろ。』

「さぁ……戦闘開始だ！」

戦闘訓練（蹂躙）

『それでは……始めっ!!』ビーーーー!

サムスにとっては警報にも聞こえる開始音と共に戦闘訓練が始まった。

「……始めるぞ。」スッ……

ビシッ……ビシビシッ……!

轟の凍結から始まった戦闘訓練。轟は防衛戦に持ち込むと思っていたが、サムスは寒さに弱いため、現状の天敵とも言える轟を真っ先に狙っていた。

「……」タッ……

「チッ……お見通しって訳か。爆豪、ここは頼ん「行かせる訳にはいかない。」……クソっ。仕方ねぇ。ここで戦うぞ。」

サムスは人数不利になってでも入口を塞いで核爆弾の回収をできなくした。予め窓などの侵入口は瓦礫等で塞いでいるため、轟達の勝利条件はサムスを倒すしかなくなっ

た。爆豪は完全に頭に血が上っていてかつ、プライドが邪魔をして瓦礫をどかして移動するという選択肢は潰れていた。

「アダム、行くぞ。」スチャ……

「舐めやがって……いいぜ。完膚なきまでに俺がぶっ殺してやる。」

「くらえ！」ビシビシッ！

「おっと、危ないな。だが……エミーと言う理不尽を相手した方がマシな難易度だな。簡単すぎる。……あぁ、すまない。こちらの話だ。」

サラッと爆弾発言をしたサムスは背中のブースターを駆使して素早く無駄のないサイドステップで轟の凍結攻撃を回避する。

「どこまでもコケにしやがって……！」

「こっちは地獄の訓練をずっとこなしていたんだ。お前達に負ける訳にはいかない。」

「それは俺もだ！」

「ほう？何百倍もの重力がかかる重力ルームでプロヒーローを相手したり、攻撃が一切通じないロボット相手にひたすら追いかけっことカウンターの練習をした事があるか？」

サムスは何処か遠い目をしてそう問いかけた。当然轟は驚く。自分ほど努力を欠かした事はない奴はいない。地獄を乗り越えたのは自分だけだと思っていた。だが現実はどうだ。相手は下手をしなくても死ぬような環境で訓練という名の1種の拷問とも言える事をしていたのだ。――――――――　負ける。そう思ってしまったのが轟の敗因だろう。

『サムス。ミサイルのデータが送信された。今ダウンロードしている。』
「了解だアダム。……遅いな。トドメだ。」ビュン！
「ぐあっ!?」ビターン！

轟はサムスの圧倒的なスピードで地面に叩きつけられて気絶。残すは轟の広範囲攻撃のせいで上手く手出しできていなかった爆豪となった。

「クソが……役立たずめ。」
「役立たずは君だ。連携どころか援護もしないとはな。……戦闘センスは高いみたいだが、協調性は皆無のようだ。……そんなことでは私に勝てないぞ。」
「うるせぇ！俺は負けねぇ！」ガコン！

『爆豪少年！それはダメだと言ったはずだ！』
「ふむ。これでは核爆弾が巻き込まれて私の負けになるな。では撃つ位置をずらしてもらえばいい。こっちだ。」コツ、コツ、コツ……
　サムスは突如爆豪の反対側……つまり、核爆弾のあるビルを見る様に立ち位置を変えた。

『むぅ……しかし、それでもサムス君が巻き込まれてしまう。』
「さぁ、この方角なら最大火力で撃てるだろう？……撃ってみろ。私は無傷でここに立っている。」

「舐めやがってぇぇぇ！死いいいいねぇぇぇ！」ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＭＢ!!!
『爆豪少年!!』
「はぁ、はぁ、はぁ……汗腺を犠牲にした一撃だ。これでスーツを木っ端微塵に……な!?」
　……爆煙が晴れた先にはボロボロのサムス……もちろんそんな訳はなく、傷１つないサムスが立っていた。サムスの後ろのビルは人型のシルエットの跡を残して木っ端微塵になっていた。サムスのバリアスーツが如何に頑丈で、如何にサムスが爆風から身動

ぎしなかったかが分かる光景であった。

「さぁ、さっきの一撃で汗腺がやられたのだろう?……トドメだ。」ビュウン!

「がっ!!」

脳天に威力を弱めたビームを受けた爆豪は気絶して、そのまま倒れ……なかった。サムスが受け止めたからだ。

『ヴィランチーム、ＷＩＮッ!!!』

「さて！講評の時間だ！誰がＭＶＰかは一目瞭然だね！」
「はい！サムス君です！」
「正解だ！理由は？」
「まず、瓦礫で核爆弾に到達させなかった事！さらに轟君に広範囲攻撃を誘発させて擬似的な１対１を仕掛け続けた事です！そして最後に爆豪君の広範囲攻撃で核爆弾を破壊されないように発射方向を変更させた事が主な理由です！」
「うん！概ねその通りだ！……っと！時間も時間だし、私はそろそろ緑谷少年の様子を見てくるとするよ！」ピュイーーー！
『サムス。オールマイトのバイタルに異常な数値が計測された。』
「……なに？」
『具体的には身体機能が最初より低下し続けていた。何か理由があるのだろう。保健室へ向かうべきだ。』
「そうだな。……みんな！私は出久君の様子を見てくる！」
「そうか！戻るのが遅れていたら相澤先生に伝えておくわ！」

保健室

ガラガラ……

「……む？保健室にはオールマイトが居るはずだが……」

「サムス君!?どうしてここに!?」

「いや、アダム曰く、オールマイトのバイタルが異常な数値を示したからな。気になって来たのだが……肝心のオールマイトが見つからない。アダム。生体反応はリカバリーガール、出久君、オールマイト、そして私の筈だ。だが、そこの目の前にいるガリガリ

の人物からオールマイトと同じ反応がある。……出来れば説明してくれないか？」

「……見破られたか。6年前、あるヴィランとの戦いで重傷を負ってしまってね。呼吸器官半壊、胃の全摘出を必要とする重傷。その後、度重なる手術と後遺症の影響で普段はこの姿なんだ。いつも君達が見ている姿は精々3時間しか維持できない。……これは内密にしてくれ。」

「……成程。レイヴンの予測は当たっていた訳か。」

「……そのレイヴンという人物はどんな人物なんだい？」

「無愛想でスパルタ。あのスーツで一切ダメージが与えられない化け物です。正直オールマイト、今の貴方では勝てない。それこそ体内エネルギーを全て使って人間爆弾にでもならない限り。」

「レイヴンビークか……1度会ってみたいね。」

「やめといた方がいいですよ。多分開口一番戦えってなって、散々ボコボコにしてこの程度か。つまらん。って言った後に玄関から投げ捨てられますから。」

「ｏｈ……　随分と具体的だね。」

「それぐらい強いし戦闘狂なんですよ。」

「おっと、そろそろ時間なので教室に戻ります。失礼しました。」ガラガラ……

（サムス君……君は……いや、今はそれを考える時間ではない。ワンフォーオールは既に緑谷少年に託した。それとなく緑谷少年のサポートをしてくれるようにできるか？）

マスコミ突入！

「オールマイトについて一言！」
「えーーっと……すごい筋肉でした！」

「……アダム、一応アレを録画しろ。」
『了解。……マスコミとやらはなぜこうもプライバシーを破壊するような事をするのだろうか。』
「生活がかかっているのもあるだろうが、他にも色んな理由があるだろう。……もっとも、彼等には邪な理由がありそうな気がするが。」
　朝登校していると、クラスメイトがマスコミに質問責めされていた。私はこのスーツのせいか生徒と思われなかったようで、まるでゴミのように無視されている。
「……そこの方、なぜそのようなスーツを着ているのでしょうか。」
「む。貴方は……」
「なに、しがない底辺記者さ。……ボイスレコーダー、いいかい？」スッ……

「……アダム。」
『了解だ。こちらでもボイスレコーダーを起動した。そちらに都合がいいような加工をした場合、この無加工の音声を拡散する。異論は無いな？ジェントルマン。』
「それで構わない。……録音開始。」ピッ
「私の名はサムス。サムス・アランです。」
「ではサムスさん。まず、貴方のスーツについて聞きましょう。なぜそのようなスーツを着ているのでしょうか？」
（Ｘの事はあまり日本では認知されていない。ここは伏せておくべきか……？いや、言うべきだろう。言わなかったらかえって不信感を抱かせてしまう。）……寄生生命体、Ｘについてご存知でしょうか。」

「ええ。突然変異により発生した、寄生対象のＤＮＡを抜き取り、そっくりに擬態する事で増殖する生物ですよね？それで、寄生された人物はワクチンが間に合った１人を残して全員死亡したと……」
「はい、それで合っています。……その唯一の生存者は私です。このスーツは私の２人の義父によって設計されたものです。Ｘに対抗できるのはワクチンを打ち込まれた者だけなので、擬態したＸにこのスーツで対抗できるようになっています。」

「成程……その戦う術を身につけるために雄英に入ったのですね？」
「このスーツをメンテナンスできる教師は雄英の教師しかいないと考えてここに入学しました。」
「成程……おっと、そろそろ時間ですね。ご迷惑をお掛けしました。……録音終了。ご協力ありがとうございました。」ピッ
「では、これにて。」タッタッタッ……

『マスコミと言っても様々な者がいるのだな。……あれが底辺記者というのはいささか

信じられないが。』
「きっと隅に追いやられるような望まれていない取材ばかりしているのだろう。それでも一定の成果は出しているからクビにはならない……ではないか？」
『世の中にはそんな理不尽があるのだな。』
「私には既にレイヴンという理不尽がいるのだが……」

「昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績見せてもらった。爆豪、お前はもうガキみてぇなマネするな。能力あるんだから」
「……わかってる」

相澤が爆豪に対して注意をすると、爆豪は俯いたまま返事をした。
「で、緑谷はまた腕ブッ壊して一件落着か」
相澤に自分の事を言われた緑谷は、ビクッと肩を跳ね上がらせる。
「個性の制御…いつまでも出来ないから仕方ないじゃ通させねぇし通せねぇぞ。俺は同じ事を言うのが嫌いだ。だが、それさえクリアすればやれる事は多い。……焦れよ緑谷」
「っはい！」
相澤が睨みをきかせつつも緑谷に助言をすると、緑谷はピシッと構えて元気よく返事をする。
「さて、今日はお前らに……」
「学級委員長を決めてもらう！」
「「超学校っぽいのキターーー！」」
「ハイハイ！俺やる！」
「僕のためにあるやつ☆」
「オイラのマニフェストは膝上３０ｃｍ！」
「皆！静粛にしないか！ここは投票で決めるべきだ！」

「……いや！腕そびえ立ってんじゃねぇか！」
「出会ってすぐで、信頼も何も無いのに？」
「だからこそ！ここで票を集めた者が相応しいのではないか!?」
「なんでもいいから早く決めろ。俺は寝る。」（ ⊠ω⊠ ） スヤァ…
「言っておくが私はパスだ。スーツのメンテナンスとかで忙しいからな。」

「……ぼ、僕が3票ウゥゥゥ!!??」
「なっ!?俺に1票入っている……？一体誰が……」
（私は天哉君に入れたのだが……本当にどこまでも真面目だな……）

「はぁ……こういう時せめてヘルメットを取れればいいのだがな……」
『それは出来ない。君のスーツは一体化した設計だ。我慢しろ。異論は無いな？レディー。』
　私は今、屋上でゼリー型飲料を摂取していた。……本当に不便だ。さすがにこのバイザーの形は何とかならなかったのかレイヴン達に問い詰めたい。だが、モジュール式である以上拡張性は高い必要があるから下手に弄れないのだろう。
「むう……」

ウー！ウー！ウー！『緊急警報発令！セキュリティ３が突破されました！生徒は至急屋外へ避難してください！これは訓練ではありません！繰り返します……』
「何事だ……？」
『スキャン中……スキャン完了。マスコミと推測。動く必要性は……いや、職員室に生命反応が急に現れた。ワープ系の個性で侵入したと推測。すぐさま調査をするべきだ。異論は無いな？レディー。』
「だがヴィランの可能性もある。スーパーミサイルの使用許可を。」
『許可する。敵が撤退する前に急いで向かうぞ。』
「言われなくとも！」ダッ！

『死柄木　弔、見つけました。雄英のカリキュラムです。』
「へへっ。セキュリティがガバガバなんだよ。……オールマイトは……ＵＳＪにいるのか。よし、黒霧、帰「動くな。」……なんだ？」
「動くな。動いたらこの場で倒す。」スチャ……
「はぁ……バレちまったじゃねぇか。……とりあえず帰るぞ。」
『分かりました。』ズズズ……
「くっ！」ビュゥン！ビュゥン！
　逃がすまいとサムスはアームキャノンのビームで応戦するが、何故か黒い霧のような男には攻撃が当たらない。驚くサムス。その隙に２人に逃げられてしまう。
「くっ！逃がしたか……！」
『スキャン完了。黒い霧と本体の場所があると推測。個性……両者不明。名称……両者

不明。データベースに存在しない人物。あの２人はヴィランの可能性が高い。』
「おい！大丈夫かサムス！」
「マイク先生……私は大丈夫です。しかし、ヴィランに侵入されてカリキュラムを見られました。」
『ログではオールマイトはＵＳＪにいることを確認していた。注意されたし。』
「そうか……分かったぜ！」

「……さて、雄英バリアーの件といい、サムス君の報告も併せて考えると、敵はオールマ

イト君が狙いの可能性もある。オールマイト君。十分注意してくれたまえ。」
「はい！」
「それと、レイヴンビーク本人からの要請で、ＵＳＪの警備をさせて欲しいとの事なのさ。」
「レイヴンビークが？」
「戦力は大いに越した事はないのさ。幸いにも襲撃するであろう時間帯はわかっている。その時間帯は警戒を厳しくするように。異論は無いね？」
「「ありません。」」

「ただいま。」
「おかえり。サムス。レイヴンが何やら話をしたいそうじゃよ?トレーニングルームで待っているそうじゃ。」
「分かった。行ってくる。」

トレーニングルーム
「……来たか、サムス。アダムから報告は聞いた。……明日は俺がＵＳＪという場所で警備をする。……ヴィランの襲撃があるのならより一層訓練をするべきだ。今日はＥ・

M・M・I・との訓練を取りやめて俺と訓練するぞ。」
『ヴィランの強さが明確でない以上、ここは訓練するべきだ。異論は無いな？レディー。』
「はぁ……分かった。」

人命救助訓練

「さて、今回のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そして2人のプロヒーローでやる事になった。片方はもうここに来ている。入ってきてくれ。」

ガラガラ……!

「すげぇでけぇ!」

「異形型かしら……」

「メカメカしい……!」

「見たことないヒーローだ……」

「さて、今回来てくれたのはチョウゾヒーロー、レイヴンビークさんだ。」

「レイヴンビークだ。よろしく。」

「この人がサムス君の言っていたレイヴンビークさん……!」

「知ってるの!?サムス君!」

『知っているも何も彼はサムスの義父だ。だが君達が知らないのも無理は無いだろう。レイヴンがヒーローとしてメディアに写った事はデジタル、アナログ共に無い。』

「相澤先生よりも知名度が無いってこと!?」「おい」
『サムスなどの親族や救助者、そしてヴィランを除けば知っている者は０に等しい。』
「ふん。俺の事を何時まで話している?さっさと本題に入れ。」
「今回の訓練内容は人命救助訓練。ここから遠いからバスで向かうぞ。そんで、コスチュームなんだが、各自の判断に任せる。場所によっては足枷となる設計の物もあるからな。それの判断もしてもらう。」

「みんな!バスに乗った順に席に座るんだ!」

「早速委員長らしい事をやってるな。天哉君。」

「くうっ……このような形だったとは……不覚！」
「意味なかったね！」
「ぐうぉあああああ!!」
天哉君が謎の後悔？をしてそれを芦戸が慰めるが、逆効果だったようだ。
「サムスちゃん……私、思った事はなんでも言っちゃうの。」
「ふむ。なんだ？梅雨ちゃん。」
「梅雨ちゃんと呼ばれて嬉しいわ。……あなた、性別はどっちなのかしら？」
「私か？私は女性だ。……あまり女性扱いされたくないがな。」
「「「「……そうなの!?」」」」

「女に見えねぇ……」
「なぁ！スリーサイズ教えてくれよ！」
「いいぞ。Ｂ１０６、Ｗ６０、Ｈ９０だ。」
「まじかよ!?八百万クラスじゃねぇか！」
「まさかこんな所に伏兵がいたなんて……」
「あと、レイヴンビークさんとは普段何をしているか気になるわね。」
「訓練だ。具体的には何百倍もの重力がかかる部屋でレイヴンと戦闘。さらにレイヴンが仕事している間は代わりにＥ．Ｍ．Ｍ．Ｉ．というロボットでの訓練をしている。」
「Ｅ．Ｍ．Ｍ．Ｉ．？」
「Ｅ．Ｍ．Ｍ．Ｉ．はＤＮＡ採取を目的としたロボットだ。並の装甲は一切使っていないからこの場で倒せるのはレイヴンだけだ。パワーも拡張性も私以上か同等かもしれないな。まぁ、それを改造して訓練用に使っている。毎回ローブ義父さんがメンテナンスをしているから暴走の心配も無い。」
「……そろそろ着くぞ。準備しろ。」
「了解だ。俺は先に向かう。」ガラ……
「おい、窓を開けてどうす……!?」
「レイヴン……またやったな。」

レイヴンは窓からバスを飛び降りて先にＵＳＪ?とやらへ向かった。相変わらずやることが『サムス』よりもぶっ飛んでるんだ。何故あんな危険な事を……いや、そもそも重力が軽すぎてかえって戦い辛いなんて言っていたな。……それにしても、人命救助訓練か。『サムス』なら……いや、これは考えるだけ無駄だな。

敵連合と闖入者

「ＵＳＪかよ!?」
「……家に同じ構造を組み込むか。」
「やめろレイヴン。私が死ぬ。」
「はい！水難事故、土砂災害、火事ｅｔｃ……あらゆる事故や災害を想定し私が作った演習場です。その名も……ＵＳＪ（嘘の災害や事故ルーム）！」

「スペースヒーロー『１３号』だ！災害救助で目覚しい活躍をしている紳士的なヒーロー！」
「わー！私好きなの！１３号！」
　緑谷と麗日が興奮気味に言い、麗日に至ってはキャッキャとはしゃいでいた。
　一方相澤は、オールマイトがまだ来ていない事について１３号と話していた。
「１３号、オールマイトは？ここで待ち合わせるはずだが」
「通勤時に制限ギリギリまで活動してしまったみたいで……仮眠室で休んでいます」
「不合理の極みだなオイ。レイヴンを連れて来て正解だったな……」

「仕方ない、始めるか」
「えー、始める前にお小言を一つ二つ…三つ…四つ…」
((増える……))
　13号が小言を1つずつ増やすと、生徒達は心の中でツッコミを入れる。
　すると13号は、自分の〝個性〟を生徒達に説明する。
「皆さんご存知だとは思いますが、僕の〝個性〟は『ブラックホール』。どんな物でも吸い込んでチリにしてしまいます」
「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね！」
　緑谷が13号の話を聞いてそう答え、麗日は激しく首を縦に振った。
　すると、13号が説明を始めた。
「ええ……しかし、簡単に人を殺せる力です。皆の中にもそう言う個性が居るでしょう」
「この超人社会では個性の使用を資格制にし、厳しく規制する事で一見成り立っているようには見えます。しかし一歩間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持っていることを忘れないで下さい。相澤さんの体力テストで自身の力が秘めてる可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います。この授業では心機一転！人命の為に個性をどう活用するかを学んで行きましょう

！君達の力は傷付ける為にあるのではない。あなた達のチカラは救ける為にあるのだと心得て帰って下さいね？」

１３号がそう言うと、サムスは考えた。結局の所、個性はその人にしか使えない『道具』であり、特別なものではないのではと。

「以上！ご清聴、ありがとうございました！」

「ステキー！」

１３号が礼をしながら締めくくると、麗日と飯田は声を上げた。

「そんじゃあまずは…「イレイザー。」どうした？」

相澤の話を遮ってレイヴンがアームキャノンで相澤の背後を指差すので相澤が振り向くと、黒い渦のようなものが不気味に揺れ動いており、渦が少しずつ大きくなっていた。そこから『全身に手の装飾らしきものをつけた男』、『黒い靄のような男』、そして『脳味噌が剥き出しの大男』を筆頭にぞろぞろと大量のヴィランが出てきた！

「先生！あれが昨日の奴です！」

「１３号！サムス以外の生徒を連れて避難しろ！ここは俺とレイヴンとサムスで食い止める！」

「なんだ？あれ。入試みたいにもう始まってるパターン？」

『１３号に、イレイザーヘッドですか……おかしいですね。先日頂いた教師側のカリ

キュラムでは、オールマイトがここにいるはずなのですが……代わりに知らないヒーローがいますね。』

「どこだよ……せっかくこんなに大衆引き連れて来たのにさ…？オールマイト……平和の象徴がいないなんて…子供を殺せば来るのかな？」

「はぁ……少しは楽しませろよ？」

そう言い、レイヴンは仮面の下で不敵な笑みを浮かべた……

「先生、侵入者用センサーは！」

「勿論ありますが…」

八百万が尋ねると、１３号が答える。

すると轟が冷静に現状を分析する。

「現れたのはここだけか学校全体か…何にせよセンサーが反応しねぇなら向こうにそういうことが出来る個性がいるってことだな。校舎と離れた隔離空間、そこに少人数が入

る時間割……バカだがアホじゃねぇ、これは『何らかの目的』があって用意周到に画策された『奇襲』だ。」

広場

「さぁ、死にたい奴から前に出ろ。」スチャ……
レイヴンがアームキャノンを展開して構える。
「鳥のおっさん！俺たちを殺すだって？笑わせんな！」
異形型の男がレイヴンに殴りかかる。それをレイヴンは……
「その程度か？つまらん……」
『小指』で受け止めていた。勿論異形型の男は驚く。この男はイレイザーヘッドの捕縛

布も時間さえかければ引きちぎれる程の膂力を持っている。そのずば抜けた力を理由に手だらけの男に引き抜かれた程の実力だ。それをレイヴンはつまらなさそうによそ見をしながら受け止めているのだ。男は激昂する。

「舐めやがってぇぇぇ!!」

「騒ぐな、雑魚が。」スッ……

レイヴンが構えたのは……デコピンだ。

ビチィィィィン!!

「……かはっ。」

ただのデコピン。その一撃で異形型の男を気絶させた。後で分かったことだが、男の頭蓋骨にはヒビが入っていて、もう少し力が加わっていたら脳味噌まで吹き飛んでいたとの事だ。この一撃だけでレイヴンの手加減がどれだけ高精度なのかが分かる。

「はぁ……せっかく使えそうな奴だったのにょぉ……まぁいい。脳無、あれを叩き潰せ。」

今度は脳味噌が剥き出しの大男が恐ろしいスピードで向かう。そして大ぶりの正拳突きを仕掛けてくる。

「図体だけは立派だな。……パワーもスピードも映像で見たオールマイトの全盛期以下ではないか。それに、自我が無い。そんな戦士は雑魚同然だな。己で判断も下せないも

のはゴミクズだ。」
『……』バタバタ……

脳味噌が剥き出しの大男をレイヴンは片手で掴み、持ち上げた。１００ｋｇは優に超えそうな体格の大男をだ。
この場で間違いなく最強の戦士であるレイヴンには脳無という対オールマイト用のサンドバッグではお話にならない。それを気づかない手だらけの男は……
「なんでだよ！脳無！いいからそいつの細腕を引きちぎれ！」
脳無は主人の命令を必死にこなそうとするが、相手は片手でこちらを軽々と掴んでいる。
「成程。命令が入らないと動けない木偶人形か。ならその何も詰まっていないカラッポの脳味噌を潰せばいい。先ずは片腕だ。」ゴキ!!!!
レイヴンは脳無を手加減なしで戦っても構わない相手と見なし、脳無の右腕を軽く捻った後、脳髄に手刀を浴びせて脳無はその衝撃で一時的にダウンしてしまう。
「さて、あとはそこのガキだけだな。……終わり……ん？」
ズズズ……
レイヴンが手だらけの男を気絶させようとアームキャノンの出力を弱めて発射しよ

うとした時に、黒い靄が発生する。
『申し訳ありません、死柄木　弔。13号は行動不能にしましたが、生徒の1人に逃げられました……』
「黒霧……そんな事はどうでもいい。俺は今ここにいる鳥野郎の事を殺したくてしょうがないんだ！」
『仰せのままに。……！死柄木　弔、『先生』が来ます。』
「ほう？新しい奴か。こっちはまだつまらん奴らを投げ飛ばしただけなんだ。今度こそ俺を楽しませろよ？」

　その瞬間、黒い油のような液体が突如発生。そこから『魔王』が出てきた……
『おや？ここにはオールマイトが居るはずなんだけどね。脳無がやられたと思ってオールマイトが消耗していると思って来たんだけど……いないね。』
「……多少は骨のある奴がいるみたいだな。」
『おや？君は……個性が無い？だが、生命反応はある。ロボットではないね。……もしかして宇宙人だったりしてね。』
「ふん。貴様が俺に勝ったら教えてやる。……もっとも、俺に負けるのは確定しているがな！」

「先生……！なんでここに……！」
『申し訳ありません……脳無が一時的にやられました。再生まで時間がかかるかと……』
『問題ない。……もう大丈夫……僕が来た。』
顔の無い魔王は――――顔が潰れて表情など分からない筈なのに、不気味に、そして余裕そうに笑ったかのようだった。

サムス　視点
「……こいつ、動かない？」

サムスは倒れ伏した脳無に警戒しながら近づく。
『まだ動ける可能性はある。注意して吸収せよ。異論は無いな？レディー。』
「もちろんだ。いざと言う時はスピードブースターで……！」
突如倒れていた脳無は勢いよく起き上がり、サムスの首を両手で掴んだ。
不意を突かれたサムスは反応できずに回避出来なかった。そのサムスを無常にも脳無は絞め殺そうとするが、突如何処からともなく『青黒い光弾』が飛んできて、脳無の両腕を吹き飛ばした！
「ぐっ！……誰だ！」スチャ！
サムスは今度こそ動かなくなった脳無をいつでも吸収できるように左手を脳無に添えて、アームキャノンを光弾が飛んだ方向に向けた。そこにいたのは……

仄暗いフェイゾンの底から

あぁ……私が……消える……

私……ダークサムスは己が敗北し、負かした物の姿を自ら模倣し、自身を２度倒した『サムス』にまたもや敗北した。

惑星フェイザと同化して完全なる生命体となった筈なのに、奴は死力を尽くし私を倒した。

……消える最後に思った事は、奴と戦ってはいけない。敵対したら終わりだということである。これから今度こそ惑星フェイザの全てのフェイゾンが消滅し、二度と目覚めないというのにだ。何故、そんな事を考えたのだろうか、それは分からない。確実なのは、私はサムスに負け、消える事だ。

私はそのまま意識を閉ざした……

ここは……どこだ？私は今度こそ消えた筈。

私達フェイゾンを模倣されて肉体を何者かに作られたとは考えにくい。

もし私が模倣されたフェイゾン生命体なら消えた惑星フェイザの場所が分かるのも死んだ事を覚えている事にも矛盾が発生する。

……！あれは、サムス!?何故だ、あんな奴、サムスなら一瞬で片付ける筈……サムスに敵対されるのはまずい。……ならここは、あの黒いのを倒せばいい。確か洗脳した奴に最初は友好的に接して油断した時に騙すのを得意とした奴がいた。騙した後に敵対されるのだから、騙さなければ良い。

そうして私は黒い敵らしき奴の腕をアームキャノンのフェイゾンビームで切り落とした。

「ぐっ！……誰だ！」スチャ

私は敵対するが意思がないと伝える為に両手を上げた。するとサムスはしばらくして警戒を解いてくれた。

「お前は一体……誰なんだ？私を助けたようだが……」

何故私を知らない？私は過去に飛ばされたとでもいうのか？いや違う。惑星フェイザのフェイゾン濃度がどの時代にも合わない。というか、そもそも惑星フェイザは何処にあるのだ？近い気がするのだが、具体的な場所までは分からない。

「……とりあえずお前に敵意が無いのは分かった。だが、何故私を助けた？何故……そんなにも私のパワードスーツに似ているんだ？」

……分からない、理解不能。だが、サムスについて行くべきなのは分かる。彼女はとても強い。ならば味方につけるべきだと私の身体がそう感じている。

『サムス、奴から放射能を検知した。生身で触れれば君は瞬く間に被爆してしまうだろう。君のスーツは放射能を遮断できるが、スキャンではデータベースにあるどの放射性物質にも一致しない。できるだけ距離をとるように。異論は無いな？レディー。』

どうやらサムスは私の放出したフェイゾンに警戒しているようだ。これでは警戒されてしまうようだ。そこで私は先程撃った奴に付着しているフェイゾンを回収した。

『サムス……奴をスキャンした所、奴は今の君より圧倒的に強い。勝てる可能性はゼロパーセントだ。だが、敵意が無い。とりあえず警戒しながらその脳無とやらを吸収しろ。異論は無いな？レディー。』

「あぁ。分かっている。……お前、敵意が無いのなら行動で示していけ。私はまだお前を信用しきっていない。」

サムスにアームキャノンを突きつけられた私は信頼を得るとはこんなにも難しい物なのかと思った。だが、少しは信頼を得られたようだ。これで少しづつ信頼を得ていけばフェイゾンの生存は確実だ。

サムス　視点

「こいつは一体……」
『分からない以上、その脳無とやらの吸収で自身を強化するべきだ。スキャンによるとこの個体の個性には超再生とショック吸収があるようだ。未だに超再生は機能しているから半身を吸収すればすぐに個性を獲得できるだろう。異論は無いな？レディー。』
「……まるで、もう1人の私みたいだな。」
『違う。サムス・アランという人物はこの世で1人しか存在しない。奴は君を模倣した奴なのか、ただのそっくりな生命だ。』
「……脳無か。哀れな存在だな。改造され、命令を只只ひたすらこなし、捨てられる。何のためにこんなものを……！」
　そう言いながら、私は脳無とやらに左手で触れた。すると、脳無はみるみるうちに粒子となり、私に脳無と思わしき力が入ると同時に脳無は半身が消滅した後に再生し、今度こそ動かなくなった。
『個性因子、超再生を獲得。スーツの自己補修機能が追加されたようだ。ただし、まだ冷気の中では再生できないようだ。気をつけるように。』
「了解だ。……ついてこい。もう1人の私。」
　そう言うと、黒いもう1人の私はまるで飼い犬の様についてきたのだった……

レイヴン　視点

『……僕が来た。』

「ふん。先ずはその醜いマスクを粉々にしてやる。せいぜい私を楽しませろよ?先生。」

そう言ってレイヴンはエネルギーをチャージしているアームキャノンを魔王に向けた。

刹那、死の光の奔流がＵＳＪを流れる。その跡にはチリ一つ残らないのを魔王はその長年培った直感で避ける。

『成程。ビーム兵器が主体なんだね?ならこうだ。『空中レンズ』＋『空気を押し出す』＋『筋骨発条化』＋『瞬発力×３』＋『膂力増強×３』。これは僕のお気に入りをちょっと

組み替えた物さ。ぬんっ！』

魔王はお気に入りである人間空気砲で撃ち合いをしようとするが、レイヴンはビクともしなかった。

「……空気砲か？威力が低すぎる。そよ風でもおこしたかと思ったぞ。ほら、お釣りだ。受け取れ。」ゴォォォォ!!!

レイヴンはお返しと言わんばかりにビームを発射する。だが、突如魔王の目の前でビームは減衰してしまう。

『驚いた。だけど君の攻撃も効かないよ。お次はこれだ。『筋骨発条化』＋『瞬発力×４』＋『膂力増強×３』＋『増殖』＋『肥大化』＋『鋲』＋『エアウォーク』＋『槍骨』。……君を殴り、殺す。』

「……無駄にでかい拳で殴っても私には効かない。……さぁ、打ってみろ。」

『あぁ……哀れだね。自分の力を過信して負けるなんて。はぁぁぁ!!』

魔王は今出せる最適な一撃を放った。魔王はレイヴンをオールマイトと同等かそれ以上の脅威とみなしたのだ。だが、なまじ中途半端に実力を見て、今のオールマイトクラスの脅威と見なしたためか、レイヴンの実力を見誤ってしまった。

ドッッッゴオオオオオオオオオオン!!!!!!

轟音。それだけがその場を支配した。そして土煙が晴れた先には……『無傷でこちらを至極失望したような表情で見ているレイヴン』がいた。

『……なんでかな？確かに手応えはあったはずだけど……効いてない？』

「失望したぞ。……さっさと失せろ、雑魚。」

『……驚いた。僕を雑魚呼ばわりするなんてね。だけどさすがに『2人』を相手するのはキツいかな……弔、ここは帰ろう。』

「てめぇ……いつか俺が殺す。」

ドゴオオオオオン！

パラ……パラ……

「私が来た……！」

「ふん。遅いぞオールマイト。御一行はもう帰る支度をして帰ってしまった所だ。あの顔の無いマスク男……弱かったな。俺はもう仕事をしたから帰って寝る。ではな。遅くやってくる平和の象徴。」

そう言うとレイヴンは翼を生やし、家へと飛び去って行った……

「顔の無いマスク男……もしや。いや、まさかな？」

???

「……本気でやるのか？」

『もちろん。そうでもしないとあれには勝てない。奴め、僕を雑魚呼ばわりしたんだぜ？だったら雑魚呼ばわりできないようにするしかないだろう。』

「……そこまでの覚悟なんじゃな？よし、手術を始めるぞ。」

個性　ダークサムス

「……お前の名前はなんだ？それぐらいは聞きたい。」
『ウ……ア……ダーク、サムス。』
　黒いもう1人の私は日本語が苦手なのか、テレパシーか何かでカタコトでダークサムスと答えた。
『テキ……チガウ……ダークサムス、テキジャナイ。』
　ダークサムスは敵意が無いのを伝えてきた。
『凄まじい学習速度だ。もしかしたらXに近い模倣する性質があるのかもしれないな。』
『ダークサムス、フェイゾンセイメイタイ。エックス？ジャナイ。』
　ダークサムスは己をフェイゾン生命体と答え、Xとは違う生物であることを伝えた。こうして見るとできるだけ身振り手振りで伝えてきて甲司君に何処か似ているような気もする。
『フェイゾンについて検索中……データベースに……驚いた。レイヴン達の所にあるそうだ。フェイゾンとは、意思を持つ放射性物質で膨大なエネルギーを作る代償として、汚染されると凶暴化するか死ぬかの2択となってしまう。稀に生物として生まれる事

もある。』
「……レイヴンの所にあるのか？」
『本人に詳しく聞こう。異論は無いな？レディー。』
「了解だ。」

「おーーい！サムス君！大丈夫か!?」
「あぁ、問題ない。」
「……その後ろにいるのは？」
　天哉君がダークサムスについて聞くと、ダークサムスはゆっくりと浮遊しながら近づき、一礼をして……
『ダークサムス。ダークサムスハ　サムスノミカタ。テキジャナイ。』
「ダークサムス君か……！俺は飯田　天哉。よろしく！」スッ……
　ダークサムスに天哉君は握手をしようとするが、ダークサムスは首を振った。
『ダークサムスは放射性物質の塊だ。ダークサムス自身の意思なのか放射能の拡散はされていないが、触れれば当然被爆してしまう。握手は悪手だろう。』
「……それ、ダジャレで言っているのか？」
『私は至って真面目だ。ダジャレなど言わない。』

「そうか……ならこうだ！」ペコリ。
天哉君は握手できない代わりにダークサムスの真似で一礼をして挨拶を返した。
ダークサムスは満足そうにしていた……

「お前ら、今日はもう帰れ。今回の襲撃で明日は休みだ。」

「ただいま、ローブ義父さん。……フェイゾンについて、何か知っている？」
私の問いにローブは目玉が飛び出るのではないかと思うほど目を大きく丸くして驚

いていた。
「……何故、その事を知っている。」
「友好的なフェイゾン生命体と出会った。だから、フェイゾンについて教えて欲しいんだ。紹介しよう。……ダークサムスだ。」
　私の紹介と共にダークサムスは一礼をした。それに驚いたローブはずり落ちたメガネを直し、信じられんと呟いていた。
「……フェイゾンについて話すならわしらの素性も明かさねばな。……わしらはチョウゾという宇宙人なんじゃよ。」
「いや、薄々勘づいてはいた。明らかにスーツを着ていないレイヴンとローブがそっくりだからな。それに、レイヴンには重力ルームの中であんな馬鹿げた身体能力を見せられたんだ。」
「……それもそうじゃなぁ。儂も老いたかもしれん。そんな事にも気が付かないとは……とりあえず話の続きじゃ。そうじゃな……儂らがメトロイドを創った所から話そうとしよう。」

儂らはチョウゾの若い者達だった。ある時、ＳＲ３８８という惑星の開拓中にＸを発見したのじゃ。それに対抗するために、儂らはメトロイドというエネルギー吸収に特化した人工生命体を創った。Ｘは凄まじい勢いでメトロイドに捕食されて行き、絶滅寸前まで追い込まれた。だが、それでも残ったのは、メトロイドには極端な寒さに弱いという弱点があったからじゃ。寒冷地のＸはそこを拠点として生き長らえた。儂らはそこを隔離する事でＸを食い止めていた。

儂らチョウゾには2つの部族があったんじゃ。レイヴンの属するマオキン族、儂が属するソウハ族。

マオキンは戦いに長け、ソウハは技術に長けていた。……あまり大差は無いのはここだけの話じゃ。

ある時、儂とレイヴンはある情報をもとに、地球にXがいる事を知った。Xの危険性は我々チョウゾが1番分かっている。しかし、儂らが着いた時には既にサムス。……君しか生存者は残っていなかった。

すぐさま儂らは現地でメトロイド細胞を生成、君に打ち込んだ。君が寒さに弱い理由はここから来ておる。

儂らは再びXが出てこない様に地球に住む事にした……

「……これで儂らの素性については終わりじゃ。次はフェイゾンについて話さねばな。」
『ヒツヨウナイ、タブンダークサムス、ヘイコウセカイノフェイゾン。セイシツ　チガウカモ。』
「平行世界……それなら、平行世界でサムスと対峙して模倣したと考えれば君がダークサムスと名乗った事に辻褄が合うかな?」
　ローブがそう言うとダークサムスはコクリと頷き、肯定の意を示した。
「ダークサムス……私の個性として登録させてくれないか?」
『コセイ?』
　ダークサムスは個性について知らないため首を傾げる。
「個性はその人物しか持たない能力みたいなものだ。」
『トツゼンヘンイ?』
「まぁ、その考えでいいと思うぞ。」
　ダークサムスは物分りがとても良い。本当に放射性物質の塊なのか疑問に思う程だ。

「皆、おはよう。」
「相澤先生復帰早っ!?」
「あんなの傷に入らない。さぁ、早速の所悪いが、新しいクラスメイトを紹介する。」
「出ていいぞ。ダークサムス。」
　私がそう言うと私の身体から霊体化していたダークサムスが出てきた。
「「なんだこいつ!?」」
「ケロッ。サムスちゃんのスーツにそっくりね。」
『……ダークサムス。ヨロシク。』
「「喋った!?」」

「フェイゾン生命体のダークサムスだ。便宜上サムスの個性として登録してあるが、れっきとした独立している生命体だ。あと、ダークサムスには不用意に触れないように。ダークサムスはフェイゾンという放射性物質の塊だ。ダークサムス本人は普段はフェイゾンを押さえ込んで触れても大丈夫になっているが、変な感じに触れれば被爆するから気をつけるように。」
「「怖っ!?」」
「そんで、新たな戦いが迫って来ている……」
『タタカイ?』
「雄英体育祭が迫っている!」
「「ガッポイのキターーー!!」」
※　ガッポイとは、学校っぽいの略である。

「ヴィランが攻めてきてすぐなのにやるのかよ!?」
「だからこそだろ? 峰田の言う通りだ。確かにヴィランが攻めてきてすぐにやるのかという声は出るだろう。だが、ヴィランの襲撃如きでこの行事は中止にならないし、警備は例年の5倍は増やす。これで異論は無いな?」
『私の真似をするな。イレイザーヘッド。』

「この言葉は非常に合理的だ。だから使わせてもらうぞ。」

E・M・M・Iルームでの特訓　前編

ざわ……ざわ……

A組の教室の前には、何故か他のクラスの生徒達が大勢集まっていた。

「出れねーじゃん！何しに来たんだよ」

峰田が教室から出れない事に文句を言う。

「……おい、どけモブ共。邪魔だ。」

「おや？ヒーロー科がそんな事言っていいのかい？ヴィランの襲撃を退けて調子に乗っちゃったのかな？」

「うるせぇ。そんな事言っているからてめぇらはモブのままなんだよ。」

「こういうの見ちゃうとちょっと幻滅するなぁ……普通科とか他の科ってヒーロー科落ちたから入ったって奴、結構いるんだ。知ってた？体育祭での成績次第ではヒーロー科編入も検討してくれるんだって。その逆もまた然りらしいよ？」

「ほかのやつらは敵情視察なのかもしれないけど、少なくとも俺は、調子乗ってっと足元

ゴッソリ掬っちゃうぞっつー宣戦布告しに来たつもりだから。……ね？」

『イレイザーヘッドの言葉を借りるが、非合理的だな。』

「……なんだって？」

「アダム！」

『非合理的だ。本気でヒーロー科へ編入するのならこんな所で喋っていないで特訓をするべきだ。異論は無いな？1年C組、心操　人使。』

「……なんで、俺の名前を。」

心操が名前を言われた事に動揺していると、B組の方から1人来る。

「隣のB組のモンだけどよぅ!!ヴィランと戦ったっつうから話聞こうと思ってたんだがよぅ!!エラく調子づいちゃってんなオイ!!!」

「……君は。」

「俺は鉄哲徹鐵！B組のモンだ！てめぇ、なんで雄英の制服を着ていないんだ！」

「私のこれは身体と一体化したパワードスーツだ。着脱不可だから着用を許可されている。」

「あぁ、それとだ。私たちヒーロー科はいつでも君達の挑戦を待っている。だが来たのならば……全力で叩き潰す。それが礼儀だからな。」

そう言って私はそのまま家へと帰……れなかった。
「ねぇサムスちゃん。私、サムスちゃんのお家に行ってみたいの。普段貴女のトレーニングがどうなのかね。」
「梅雨ちゃん？」
「あ！私も気になるんだよね！」
「オイラも気になるぞ！」
「俺も気になるぜ！」
「三奈ちゃん……実君……鋭児郎君。ちょっと待っててくれ。レイヴンに許可を貰わなくては。アダム。」
『了解。……レイヴンからE．M．M．Iルームの使用許可を貰った。』
「E．M．M．Iって、この前言っていたロボットの事ね？」
『E．M．M．Iには非常に強固な装甲を搭載している。まともな戦いはできないぞ。それでもついてくるか？』
アダムが警告紛いの言葉を投げかけるが、彼女達の意思は変わらないようだ。皆首を縦に振った。

「ただいま、ローブ義父さん。紹介しよう、私のクラスメイトの梅雨ちゃんに、三奈ちゃん、実君、鋭児郎君だ。」
「おぉ。クラスメイトを連れてくるなんて珍しいのぅ……あぁ、儂はクワイエットローブ。ローブとよくサムスには呼ばれているよ。」
「レイヴンからＥ．Ｍ．Ｍ．Ｉの使用許可が降りたらしいが、どのＥ．Ｍ．Ｍ．Ｉを出すのじゃ？一応全機使用可能じゃが。」

「そうだな……０３と０４を使おう。」
「いきなり０３と０４をやらせるのか？いささかキツいと思うのじゃが……」
「構わないぜ爺さん！俺たちゃそんなヤワじゃねぇ！」
「私はダークサムスと０５の相手をする。０６程ではないが中々勝てなくてな。」
「そうか……なら、あっちの特別スーツを着るように。サムスのパワードスーツの最低限の力を引き出してくれる。何せサムスの身体能力が前提の場所じゃからな。」
「オイラはブカブカになっちゃうんじゃないか？」
「伸縮式だから君のような小柄な子でもつけられる。さぁ、Ｅ．Ｍ．Ｍ．Ｉルームはあっちじゃ。」

E．M．M．Ｉルームでの特訓　後編

家庭訪問組視点

「……不気味な空間ね。」

『さて、ここからは儂のサポートである程度説明する。E．M．M．Ｉはまだ動かしてないから安心せい。』

「このスーツ、こんなコンパクトなのに通信機能まであるのか……」

『それはどのスーツにもつけてある基本的なものじゃ。さて、E．M．M．Ｉの基本的な行動ルーチンを説明しよう。E．M．M．Ｉはまず、E．M．M．Ｉルームでのみ活動できる。君達が目指すゴールは最奥のセントラルユニットという機械のある部屋じゃ。そちらのバイザーにマップを送ったから、それを参考に向かうと良い。』

『E．M．M．Ｉは最初はパトロールモードという状態で動いておる。これはE．M．M．Ｉにぶつかったり頭部のセンサーに入ると、チェイスモードに移行する。これは後で説明する。この部屋が出す特殊なパルス……つまり、君達の足音などに反応すると次のサーチモードに移行する。これは足音の場所へ向かい、隠れて居そうな周辺を探すから注意するのじゃ。そしてチェイスモードに移行すると君達を捕まえて来る。一定距

離振り切ったり、E．M．M．Iの視界外に行けばサーチモードに移行するから諦めるでないぞ？』

『あ、言い忘れておったが、E．M．M．Iには一切の攻撃が効かない。妨害もその圧倒的なパワーで振り切ったりするから、基本逃げに徹するのじゃ……いいな？』

『これで説明は終了じゃ。ま、頑張って先ずは03のステージのゴールを目指すのじゃ。』ブツッ。

クワイエットローブは念を押すようにして通信を切った。

「E．M．M．Iか……どんな見た目のロボットなんだろう……」

「サムスちゃんはシンプルな見た目って言ってたわね。とりあえずあの03ゲートに入りましょ。」

03　E．M．M．Iルーム

ピポポポポポポポポポポポ……ピポポポポポポポポポポポ……
「これがE．M．M．Ｉルームの発するパルスかしら。」
「なんか怖ぇな、この音……」
「とりあえず進もうぜ。ここにいても見つかっちまう。」

ピポポポポポポポポポポポ……ピコン！ピポポポポポポポポポポポ！
「近づいてきてる……？」
「なんか来るよ！」

芦戸が気づいたと同時に黄緑色のロボットがこちらへ近づいて来る。
ピポポポポポポポポポポポ……
『……』ウィン……ウィン……
E．M．M．Ｉは首を動かして周囲を探るが、捕獲対象が見つからないため、パトロールモードに再び移行した。

そしてシャッターの前に行くと、その大きめのシャーシを変形させて狭いダクトのような通路を通って行った……

峰田のもぎもぎで天井に張り付いてやり過ごした４人はＥ．Ｍ．Ｍ．Ｉの性能に驚愕する。

「あんな機能があるのかよ……」

「少なくとも狭い通路に隠れるのはダメね。大人しく進みましょ。」

そう言うと梅雨ちゃんは直角の壁を這い上がって偵察をした。

「……こっちは大丈夫そうだわ。マップによるとあと少しでセントラルユニットね。」

０５　Ｅ．Ｍ．Ｍ．Ｉルーム

「ダークサムス、相手の視界内のセンサーに触れると凍らされるから気をつけろ。」

『ワカッタ。』

ダークサムスにそう警告すると、私はグラップリングビームで天井に突っ込んだ。ダークサムスもそれを見てグラップリングビームを模倣して私について来た。

ピポポポポポポポポポ……

「近いな……ダークサムス、ここは突っ込むぞ。一瞬ならセンサーに当たっても大丈夫だ。」

『了解。後ロハフェイゾンダマリデアシドメスル。』ベチャッベチャッ……

（少しは喋り方も様になってきたな。）

サムスがそんな事を考えていると、ダークサムスは粘性を加えたフェイゾン溜まりで少しでも足止めをしようとする。その後、０５に捕まりそうになったがギリギリで振り

切ってセントラルユニットルームに逃げ切った。

視点は再び０３　Ｅ．Ｍ．Ｍ．Ｉルームに移る。梅雨ちゃん達は道なりに進んだはいいものの、行き止まりにぶつかってしまった。
「ヤベェんじゃねぇか!?これじゃ捕まっちまうよ！」
「……」
峰田が焦り始めるが、梅雨ちゃんが突破口を開く。
「……ここだけ床の質感が違うわ。三奈ちゃん、ちょっとここと、あそこの床に酸を出してみて。」

「わかったよ！」ボタボタ……

梅雨ちゃんが隠された破壊できる床に気づいて芦戸の酸で溶かしてもらうと、少し穴が空いて、隠し通路が見えた。

「うー……もう無理。これ以上出したらケガしちゃう。」

「よし！なら俺の硬化でぶっ壊す！」ビギビギ！

ドゴ！ドゴ！ドゴ！ピシ……バゴオオォン！

芦戸の酸で脆くなった床は切島の硬化での連撃に耐えられず破壊される。そうすれば全員がギリギリ通れそうな細い通路に入れるようになった。

ピポポポポポポポポ……

「やっべぇ！近づいてきてる！急いで入るぞ！」

ピポポポポポポポポ……ピコン。ピポポポポポポポポ！

（急げ急げ！）

セントラルユニットルーム

バタン！

「「「うわぁぁぁぁ!?」」」

ズシーン！

「……あー、お疲れ様。」

「サムスちゃん!?なんでここに……」

「ゴール地点は全て繋がってるんだ。ほら、こちらを見ている機械がセントラルユニットだ。」

「も、もう無理……」

「コワイ……　E・M・M・Iコワイ……」

「ほっほっほっ……よくぞ儂が最後に作った隠し通路に気づいた！1発でクリアするとは、見事じゃったぞ！」

峰田と芦戸がギブアップ状態になっていると、床が動いて、エレベーターでクワイエットローブが出てきて、賞賛の声を送った。

「サムスも遂に05を突破できたのう。ほれ、サムスには褒美にスーツに……こうじゃ。」ピッピッピッピッ……

「ダークサムス。サムスに少しフェイゾンを送ってくれ。」

『ワカッタ。スコシオクルヨ、サムス。』
「……これは！」
　クワイエットローブがホログラムのキーボードを操作した後、ダークサムスがフェイゾンをサムスのスーツに注入すると、サムスのバリアスーツに追加装甲が付与され、その部分は焦げ茶色のメタリックなカラーになって、バイザーの色が禍々しい赤になった。
「ふむ、成功じゃな。それはフェイゾンスーツ。サムス、君は霊体化したダークサムスを住ませているだろう？それだとフェイゾンに汚染される可能性があるからのう。それで汚染されないはずじゃ。」
「そうか……ありがとう、ローブ。」
『ダークサムス、サムスにサワッテモイイノ？』
「左様。これからは触れても大丈夫じゃ。」
『ヤッタ……』
　その後、私達はE．M．M．Ｉルームで特訓を続けた。

波乱の雄英体育祭開催

雄英体育祭　当日

「皆準備は出来てるか!?もうじき入場だ!!」
「コスチューム着たかったなー……」
「公平を期すため着用不可なんだってよ。」
「普通科とかはコスチューム無いもんな。あっ、この菓子美味しい。」
「アダム、選手宣誓の時はミュートにしておく。喋っても無駄だぞ。異論は無いな?」
『……了解だ。』
　飯田が注意を促す中、良くも悪くもマイペースなA組の生徒達は本番前に思い思いの行動を取っていた。
「緑谷。」
　すると突然、轟が緑谷に声をかける。
「轟君……何?」
「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う。」
「へ!?うっ、うん……」

自分でも当たり前だと思っている事を言われた緑谷は、キョトンとしていた。
すると次第に轟の語気が強まる。
「お前、多分オールマイトに目ェかけられてるよな？別にそこ詮索するつもりはねぇが…お前には勝つぞ」
「おお!?クラスナンバー2候補が宣戦布告!!?」
「急に喧嘩腰でどうした？直前にやめろって……」
轟の宣戦布告に、上鳴達はざわつき切島は仲裁に入った。
「仲良しごっこじゃねぇんだ。何だっていいだろ」
「轟君が何を思って僕に勝つって言ってんのか…は、分かんないけど…　そりゃ君の方が上だよ…実力なんて大半の人に敵わないと思う…客観的に見ても…」
「緑谷も、そーゆーネガティブな事は言わねぇ方が……」
緑谷が自分を卑下すると切島がフォローしようとするが、緑谷は前を向いてさらに続けた。
「でも……！みんな、他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕だって遅れをとるわけにはいかないんだ！　僕も本気で獲りにいく！」
「……おぉ。」
そう言った緑谷の目に迷いはなかった。

すると轟は僅かに目を見開き、少し困惑したようだ。
それぞれの思いを抱え、A組生徒達は入場した……

『雄英体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはと鎬を削る、年に一度の大バトル!! どうせテメーらアレだろ!?こいつらだろ!!?ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた隕鉄の卵!!!ヒーロー科ァ!!1年!!A組だろぉぉ!?』

プレゼントマイクの紹介と共に、A組の生徒達が入場する。
「わあああ…人がすんごい…」
「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか…!これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」
「めっちゃ持ち上げられてんな…なんか緊張すんな爆豪…!」
「しねえよただただアガるわ」
「人が多いな……どれだけの集客効果があるのだ?」
緊張のあまりぎこちなくなる緑谷、冷静に上を見上げながら分析する飯田、ソワソワする切島、平常運転の爆豪、観客の反応はそれぞれだった。

『B組に続いて普通科C・D・E組…!!サポート科F・G・H組も来たぞー!そして経営科……』

普通科、サポート科、経営科の生徒達も入場する。

だが、あからさまにヒーロー科ばかりが注目されているので特に普通科の生徒達は不満そうだった。

「選手宣誓!!」

過激なコスチュームをした18禁ヒーロー『ミッドナイト』が、壇上に立ちピシャンと鞭を鳴らした。

「18禁なのに高校に居てもいいものか」

「いい!」

思わず呟く常闇に被せ気味に峰田が肯定する。

「静かにしなさい!!選手代表!!1ーAサムス・アラン!!」

「はい。」

ミッドナイトに呼ばれたサムスは、皆に聞こえるように反応し、壇上へと向かっていく。

「やっぱりサムスさんか!」

「クソが……あそこに立つのは俺だって言うのによォ……！」
「忘れがちだけどサムスって入試1位だったな。」
緑谷が納得し、爆豪が荒れていると、横から瀬呂が言った。
すると、普通科の女子生徒が嫉妬なのか付け足すように言った。
「ヒーロー科の入試な。」
『君達、ここに居ることは確かに誇らしい事だろう。だが、それで驕ってはいけない。我々雄英生は常にＰｌｕｓ　ｕｌｔｒａの精神で戦う。君達には悪いが……勝つのは私だ。』

サムスは若干……というか爆豪にほぼ近い喧嘩腰で他の生徒達を挑発する。
『以上、選手代表1年Ａ組、サムス・アラン。』
そして、そのまま頭を下げて壇上から降りた。
すると、案の定会場からはブーイングの嵐が巻き起こった。
「調子乗んなよＡ組コラァ!!」
「ふざけんなテメーーー!!!」
「死ねぇーーーーー!!!」
「どんだけ自意識過剰だよ!!この俺が潰したるわ!!」

当然B組や他の科の生徒達は怒りをサムスにぶつけた。
同じA組の生徒からも、非難の声が上がった。
「何をやっているんだサムス君!??」
「こっちにヘイトが向かってんじゃないか!!」
『これで構わない。』
A組の非難の声をアダムが遮る。
『やる気の無い奴の相手をしてもサムスの価値は下がるだけだ。やる気のある奴を倒した方がサムスの名声はより上がる。』
「アダムはこんな事を言っているが、私はお互い全力で戦うべきだと言っただけだ。少々キツめの言い方ではあったが。」

一方、壇上ではミッドナイトが競技の説明をする。
「さーて、それじゃあ早速第一種目行きましょう!」
「雄英って何でも早速だね」
ミッドナイトの説明に、麗日がツッコむ。
「いわゆる予選よ!毎年ここで多くの者が涙を飲むわ!!さて運命の第一種目!!今年は

……コレ!!!」

ミッドナイトが指し示すプロジェクターには、『障害物競走』と書かれていた。

「障害物競走…!」

「計11クラスでの総当たりレースよ!コースはこのスタジアムの外周、約４ｋｍ!我が校は自由さが売り文句!ウフフフ…コースさえ守れば何をしたって構わないわ!さぁさぁ、位置に着きまくりなさい…」

説明が終わると意図的に狭めに設計されたであろうスタートゲートが開き、ゲート上部に設置されたランプが点滅を始める。

最前列のサムスはある準備をしていた。

「アダム、いつでもいける。」

『システムオールグリーン。問題ない。……全力で行け、レディー。』

『ダークサムス、サポートスル……』

「スタァァァァァーーート!!!」

障害物競走

「スタァァァァーート!!」
「スピードブースター起動!」ビュン!!!
　私はスタートと同時にスピードブースターを起動。一気に後続を突き放した。
『さあ!轟のエキサイティンな妨害とサムスのロケットスタートから始まった雄英体育祭1年の部!実況はボイスヒーロー、プレゼント　マイクと、解説の抹消ヒーロー……ってあれ?おい、お前誰だ!?』
『おぉう。紹介が遅れてしまったのう……儂はブレインヒーロー、マザーブレインじゃ。イレイザーヘッドとはちょっと交流があっての。頼まれてしもうた。』
「何やってるんだ?ローブ義父さん……」
『じゃあ解説の鳥人間!Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?』
『えーっと、これはオッケェェェ!と言えばいいのかのぅ?』
『ノリが悪いぜおじさん!オッケェェェ!!だぜ!』
『オッケェェェ!!』
　※　この後マイクはレイヴンとイレイザーに軽くしばかれました。

「スピードブースターはやはり優秀だな！ぶっちぎりの1位だ！」
『スキャンによると前方に熱源反応が複数あり。警戒せよ。』
『ナニカミエルヨ！サムス！』
『さぁ！障害物競走と言うからにはちゃんとこちらからも妨害が入るぜ！迫り来る恐怖のロボ軍団！ロボ・インフェルノ！』
『装甲が脆いのぅ……簡単に壊せるから上手く利用するのもありじゃな。』
『えっ、壊れにくいように再設計したやつなんですが……』
『パワーローダー!?いつの間に！』
『あ、技術解説のパワーローダーです。急遽呼ばれました。』
　嘘である。ホントは自慢のロボがボロい失敗作（そんな事はローブは言っていない）なんて言われて、いてもたってもいられずに来てしまっただけである。もちろんこの後根津校長にお説教された。
「装甲がいかに頑丈と言ってもE．M．M．Iの装甲以下なら貫ける！はあぁぁぁぁ!!!」

ボゴオオオオオオン!!
サムスはロボット軍団に向かって減速するどころか更に加速して突き進み、ぶつかったロボを粉砕して一切減速せずに突破した!
スピードブースターの圧倒的スピードによって生まれる膨大な運動エネルギーにＰｔを含めたロボの装甲が耐えられなかったのだ。

『ここでサムス!まさかのダッシュでロボットを貫通して破壊だ!ロボの残骸でついでに後続の妨害もおこなうぅ!!』
『スピードブースターは一気に加速することで水上も走れる程速く移動できる拡張パーツじゃ。』
『あの加速……例えるなら殺人的な加速と表現するべきですね……恐ろしい。』

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……クソっ!早すぎて追いつけねぇ!」ＢＯＭＢ!!ＢＯＭＢ!!ＢＯＭＢ!!
「なんてスピードなんだ……!飯田以上じゃないか!」
「私も負けてないよ!」
「黒目!いつの間にきやがった!」

「サムスちゃんのお家で特訓したんだ！」
芦戸が個性把握テストの５０ｍ走で行った酸によるスケートをこの長距離でやってのけているのだ。本来の芦戸なら息切れする使い方だが、続けられる理由は……
「へへーん！轟君の氷！有効的に使わせてもらってるよ！」
なんと轟の氷を回収して無理やり傷口を冷やしてゴリ押ししているのである。凄まじい脳筋である。
「ケロッ……０４の歩行速度は参考になったわ。」
「サムスの身体能力を参考にしてもぎもぎでトランポリンジャンプだ！とうっ！」
「だはははははは！おい鉄野郎！お前より俺が上だ！」
「チキショー！ぜってえ追い抜く！」
「０４の相手と比べたら全然怖くねぇわ!!だーーっはっはっはっ！」
梅雨ちゃんがカエルにあるまじき動き方（Ｇみたいな動きとか言っちゃいけない）で猛追、峰田がもぎもぎを器用な事に着地する前に設置、それを踏み台に跳躍、また着地前に設置を繰り返して負けじとついてくる。切島は普通に鍛えられた足腰で本来よりも上位の順位を維持している。対抗意識を燃やした鉄哲は切島に根性で食らいついている。

『さぁお次は第２関門！落ちたらアウト！それがイヤなら這いずりなぁ！ザ・フォール！』
『橋を作れない者や飛べない者はロープを上手く使って渡るのじゃ。』
『サムス、ちょうどフラッシュシフトのダウンロードが完了した。使用を推奨する。』
『ダークサムスハ　トブカラ　ダイジョウブ。』
「了解だ。フラッシュシフト！」ビュンビュンビュン！
『うおっ!?なんだなんだ!?突然サムスが空中で瞬間移動したぞ!?』
『あれはフラッシュシフトというフェイゾンアビリティじゃ。ダークサムスが予め注入したフェイゾンをエネルギー源として3回まで横軸に高速移動できるものじゃ。』
『戦闘にも移動にも使える優秀なものですね。』
『ちと早すぎる気がするが第３関門の紹介だ！辺り一面地雷原！うっかり踏めば大惨事！怒りのアフガン！』
『地雷に殺傷性は無いから安心しな！ただ、音と吹っ飛ばす距離はすげぇからチビっちまうかもな！』
『個体差があるとはいえ、よく見れば見つかる地雷ばかりじゃから気をつけて進むのもありじゃな。』
「残すは直線のみか。好都合だな。……シャインスパーク！」ビュオ

オオオオオオオオオオ！

『速っ!?サムスが圧倒的な距離を離してゴールイン！地雷無視とかチートだろ!?』

『シャインスパークはスピードブースターの派生技術じゃ。エネルギーを溜めてそのまま指向性を持たせて放出。それでロケットの様に飛ぶんじゃ。』

『おっと!?緑谷が後方から爆発の推進力を利用して２位でゴール！続いて爆豪！轟！蛙吹！芦戸！峰田！切島とＡ組ラッシュだ！おぉ！Ｂ組の鉄哲徹鐵がＡ組ラッシュを止めたァ！続いて塩崎……』

「スピードブースターと相性が良すぎたな……」

「クソがァァァ!!」

「……」

「くー！結局爆豪と轟には勝てなかったぜ！」

「ケロッ。悔しいわ。」

「ふっ……我ながら素晴らしい順位だぜ……！」

「うー……手が痛い……」

「チキショー！負けた！」

騎馬戦　メンバー選択

「さて！予選通過者の４３名も決まったところで、今度は第二種目の発表よ！早速～？これ！」

「騎馬戦……か。」

『騎馬戦か。移動系か射撃系の能力のどちらかは封じられるかもしれないな。』

モニターに表示される第二種目。そこには大きく（やたら）ギラギラと光るフォントで書かれた『騎馬戦』の文字が映っていた。

ルールは簡単。今から１５分間のインターバルが取られるので、その間に２～４名から成るチームを作る。個性の使用は自由だが、悪質な騎馬崩し目的での使用は禁止。普通の騎馬戦と違い、騎馬が崩れても失格にはならない。では、どう戦うのか。

１５分間の制限時間の間に騎手が付けているハチマキを奪い合い、終了時に合計ポイントの多い上位４チームを除いて全てが失格となるのだ。

すなわち、次に進めるのは最大１６人となる。

ハチマキに書かれるポイントは、チームメンバーの持つそれぞれのポイントの合計。４３位から５ポイントずつ、個人の持ちポイントが増えていく仕組みとなっている。

「もちろん、単にポイントが上がっていくだけじゃ面白くない！ということで一位のサムスちゃん！あなたの持ちポイントは……私達の期待を込めて１０００万ポイントよ!!」
「それじゃあルールは理解できた!?今から１５分はチーム決めタイムよ！よーく考えて交渉しなさい！」

「この体育祭ってさ、社会の縮図だよな」
「そうだな。ヒーロー社会の縮図だ」
雄英体育祭は、生徒達にヒーローとしての気構えを云々というよりも社会に出てからの生存競争をシミュレートしている。
ヒーローの飽和するこの社会、一人前のヒーローとして生活もしっかりとしてくためには時に、他人を蹴落としてでも活躍を示さなければならない時がある。第一種目の障害物競走はそういった、ヒーローの生臭さを示していた。
「あれ心苦しいですよね」

「貴様、心にもないことを……！」

その一方で、商売敵と言えど協力していかなければならないという時も往々にしてある。今から始まる騎馬戦のように。

他人の個性を把握し、人間的な相性も考慮し、持ちつ持たれつ。自分の勝利がそのまま、仲間にした者の勝利にもなる。

「プロが当たり前にやってることを、子どもの内から当たり前のように学んでいるんですね」

「大変ですねぇ……」

サイドキックとの連携や、他のヒーロー事務所との合同個性訓練。それを衆人環視の中で行う。

プロならば当たり前のようにこなせていなければならないさまざまな生きる術を、子どもの内から学ばせられる雄英の子は大変だな、と今を生きるプロヒーローは溢すのだった。一方レイヴンとローブはと言うと……？

「ふん。ダークサムスを騎馬にしてサムス1人で戦えば済む話だ。」

「ダークサムスは個性扱いじゃから失格になるぞ……？」

「むぅ……仕方ない。誰か足場にする必要があるのか……」

「そんなんじゃからいつまで経っても万年アングラ系なんじゃよ……」

「うるさいぞローブ！」

「誰を仲間にするか……ミッドナイト先生！」
「あら？どうしたのかしら？サムスちゃん。」
「ダークサムスは1人としてカウント出来ますか？」
「うーん……」
　ミッドナイト先生は判断しかねているのか沈黙している。
「そうね。ノーカウントになるわ。一応個性扱いなんだし、常闇ちゃんの黒影もカウントされないわ。」
「そうですか……」

『ダークサムス、ダイジョウブ。サムスマモル。』
「なら、あの4人を誘うか……」

「成程……そんな事があって、オイラ達を誘ったのか。」
「ああ、頼めるか？」

「俺はもう爆豪に誘われたから無理だ。すまねぇ。」
「私も……ごめんね？サムスちゃん。」
「ケロッ。私と峰田ちゃんはいいけど、障子ちゃんも誘っていいかしら？」
「私は構わない。」

『サムス、ダークサムス、ヘンシンデキル。サムスタチノコト、ノセラレル。』

「……変身してみてくれ。」
『……ヘンシン。メトロイドプライム。』

ダークサムスがそう言うと、ダークサムスの身体はみるみる膨張していき、四足歩行の生物……メトロイドプライムとなった。
「デカっ!?」
「ケロッ。これがダークサムスちゃんの個性かしら。」
「蛙吹、峰田。一緒にできるか……ん？こいつは？」
「ケロッ。ダークサムスちゃんよ。ちょうど障子ちゃんを誘おうとしていた所だからよかったわ。」
「私もいいだろうか？」
「……構わない。ならダークサムスを騎馬にして残りは全員騎手にしよう。俺がハチマキをつけた峰田を完全に隠しておいて、守りは蛙吹とサムス達に任せる。」
「ケロッ。それがいいわね。」
『サムス。アレを配るぞ。』
「アレか。みんな、これを。」
サムスは量子化して仕舞っていたヘッドホン型の何かを渡した。

「これは……」
「通信機だ。目蔵君の複製腕で覆う実君とかは聞こえない可能性もあるだろう？これは脳波を検知して脳に直接言葉を送れる。」
「ありがとな！サムス！」

「――――――――――――――――――――3！」
「実君。」
「準備ＯＫ！もぎもぎは絶好調だ！」
「――――――――――――――――――――2！」
「梅雨ちゃん。」
「ケロッ。堅実に行きましょ。」
「――――――――――――――――――――1！」
「目蔵君。」
「問題ない。」

「スタアアアアアーーーーート!!」

「……行け、ダークサムス。」

『ワカッタ……全部タオス。』

乱戦で大混雑の騎馬戦　前編

「スタアァァァァーーーート!!」

「……行け、ダークサムス。」
『ワカッタ……全部タオス。』
「実質１０００万の取り合いだよなぁ!!」
「やれ、骨抜。」
「了解！」
グニャア……!
骨抜柔造の個性『柔化』により地面が柔らかくなり、ダークサムスの体制を崩そうとする。
だが、ダークサムスはフェイゾンで構成されている脚の先端を変形させ、地面に沿うように接地させる事で対処する。
「スーツ女ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛!!」ＢＯＭＢ！
爆豪がまさかの単独特攻で突っ込んでくる。だが、サムスは至って冷静だった。

「甘いな勝己君。グラップリングビーム！」ビュゥン！
「がっ!?離れねぇ！」
グラップリングビームの出力は女性にしてはかなり大きな体格のサムスを単独でぶら下げて勢いよく引っ張る事が可能なのだ。大柄とはいえない爆豪を拘束する事など容易いことである。

「範太君！忘れ物だよ！」
私はハチマキだけ奪って忘れ物を範太君に返却した。
「うおっとと!?おい爆豪！勝手に突っ込むな！」
「うるせぇ！俺は完膚なきまでの1位をとるんだ！」
瀬呂はテープで何とか爆豪を回収。独断で突っ込んだ爆豪に対して注意するが、爆豪はまた突っ込む気のようだ。

「邪魔すぎなんだけど!?」
「なんて大きさノコ……」
「なかなか進めないネ。」
「……ダメ。ポルターガイストでも脚1つ抑えられない。」

拳藤チームはメトロイドプライムの巨体に邪魔されて、一向に動けなかった。下を通ろうとしてもカサカサと素早く動くせいで通れない。

「……やるしかないね。みんな！仕掛けるよ！」

「小森！連携してこのいけすかねぇ４本脚をぶっ飛ばそうぜ！」

応援に駆けつけた鉄哲チームが加勢して、塩崎の茨、小森の胞子、柳のポルターガイスト、取蔭の身体のパーツで脚の１本に集中攻撃を仕掛けるが、メトロイドプライムの脚は無傷だった。

『アマイヨ。メトロイドプライム、ホトンド攻撃キカナイ。』

「嘘だろ!?」

『ジャア、コッチカラ攻メルヨ。』

そう言うと、メトロイドプライムの頭部が外れ、タコのよう生物が出てくる。これがメトロイドプライムの本体……つまりダークサムスであり、先程までの姿は言わば鎧の役割をしていた。だが、性能が落ちたなんて事は全くなく、寧ろスピードが上がり、突進だけだった攻撃もより激しくなる。

物間チームは爆豪に追いかけられているため、頼れるのは鱗、角取、鎌切、小大、凡戸、吹出、宍戸の７名。更にそこからメトロイドプライムに攻撃を当てられそうなのは鱗、角取、凡戸、吹出の４名。

凡戸がメトロイドプライムの鎧の脚に向かってボンドを掛ける事に成功するが、フェイゾンに汚染されてただのフェイゾンとなった。

鱗も鱗を飛ばしてメトロイドプライム本体に攻撃するが、当たっても傷1つつかない。

角取の角砲も強度不足でいとも容易く砕かれる。

吹出の擬音攻撃も効果無し。もし、フェイゾンと叫んでいたらメトロイドプライムに攻撃が効いていたかもしれないが、後の祭り。

B組は攻撃の隙を突かれてサムスと蛙吹にハチマキをみるみるうちに奪われ、残るは鉄哲チームのハチマキのみとなった。さすがに不味いとB組で鉄哲の騎馬を守り始めたので、サムス達もこれ以上は割に合わないと判断して別の騎馬を狙い始めた……

後編に続く。

乱戦で大混雑の騎馬戦　後編

「ケロッ。中々狙えないわね。」
「戦い合ってる中狙うのは不味いからな。最悪お互いが手を組む可能性もある。こちらを知らなかったB組ならまだしも、こちらの弱点を知っているA組相手に出し抜き続けるのは無謀かもしれない。」
　サムス達はA組相手に出し抜き続けるのは難しいと判断して、じっくりと攻める機会を狙っていた。
『サムス、スペースジャンプのデータが送られた。ダウンロードする。』
「スペースジャンプか……騎馬戦で使えるのか？」
「俺達相手に立ち話をしていていいのか？」
「来たな？焦凍君。私はまだ全ての武装を使っていない。そして、お互い弱点は分かっている。……これが意味する事は、こうだ！」
「ミサイルか！だが、凍らせれば関係……な!?」
　轟が氷でミサイルを打ち落とそうとするが、そのミサイルは轟殺しのミサイルだった。その効果は……

ビシッビシッ！

「凍結効果だと!?」

「アダムのスキャンで君の弱点は分かっている。……君は身体が低温状態だとまともに動けないのだろう?その逆も然りだ。そして何故か君は炎を使うのを躊躇う。弱点を打ち消せるというのに、アイスミサイルによる低温状態を何故治さない！」

「うるせぇ！俺は左は使わねぇって誓ったんだよ！」

「覚悟が足りない！だから君は私にあんな無様な負け方をしたのだ！」

轟とサムスの問答が続く。次第に轟は冷静な判断が出来なくなり焦り始める。

「アレやるぞ！八百万！準備しろ！」

「分かりましたわ！」

「今やるのか!?」

「今しかねぇ。今狙わないとコイツに逃げられる！俺が時間を稼ぐ！」

「低温がダメなのはお前もだろ?」ビシッビシッ！

轟が氷の礫をショットガンのように大量に拡散させて飛ばしてくる。どうやら私がまだ低音を克服していないのを見抜いていたようだ。

私はそれをスイスイと最低限の動きで回避する。

『サムス、スペースジャンプのダウンロードが完了した。何時でも使える。』
「これでようやく空中戦が出来る訳だ！梅雨ちゃん！出久君の騎馬は任せた！」
「了解よ。」ベローン！
「いだだだだ！」
　梅雨ちゃんのベロ攻撃で緑谷の騎馬を抑える。単独で飛んでくる爆豪を除けば、メトロイドプライムとの高低差を突破できるのは緑谷の騎馬のみだからだ。
「さあ！焦凍君！そのハチマキは頂くよ！」
「させるか！」
　サムスがスペースジャンプで飛び上がって轟達の騎馬に強襲してくる。
「今だ！上鳴！」
「それっ！無差別放電１４０万Ｖ！」ＢＺＺＺＺＺＺＺ!!
「これでハチマキは……な!?」
　放電が終わって轟がハチマキを回収しようとするが、突然誰かによってその腕を掴まれる。
「なんでサムスさん以外が無傷なんですの!?」
「助けてくれてありがとう、梅雨ちゃん。……私がダークサムスにフェイゾンの膜を作るよう命令したんだ。」

『フェイゾンノ膜、攻撃キカナイ。』
「マジかよ……!?」グラッ
「うぇぇーーい……」
「クソっ！もう時間がないって言うのに！」
「それでは私達はこれから逃げなければいけないのでね。さらばだ。」

その後爆豪が突っ込んで来たが、スペースジャンプで空中戦をできるようになったサムスの敵ではなかった。そして……

「レシプロ……バースト！」ドドドドドドドド！
『コッチノパワーヲ舐メナイデホシイナ！』ガシッ！
「しゅーーーりょーーーーー!!!」

飯田のレシプロバーストで最後の賭けをしようとするが、メトロイドプライムの体格差を埋めることは出来ずに、無常にも時間切れとなってしまった。

見えざるサムス　前編

『頼れるのは己だけ！持ってるもんを全て使って駆け上がれ！ガチンコバトルの始まりだ！』

　プレゼント・マイクの爆声が響く。正直防音機能ありでもうるさい。

『早速トーナメントの発表といくぜ！運命のトーナメントはァ……これだァ!!』

「ちょっと待ってください!!」

「あら？尾白ちゃんに……庄田ちゃんね！どうしたのかしら？」

「あの……俺達、騎馬戦が始まってから終わるまでの記憶が無くて……このままじゃこの体育祭の趣旨に反すると思うので棄権したいんです。」

「……うーん……」

「……」ゴクリ

　長い沈黙と共にミッドナイトが下した決断は……

「そういう青臭いの好み！許可します！空いた２枠には緑谷チームと鉄哲チームから１人ずつ入れるわ！」

(((好みで許可しちゃった!!)))
「ハイハイ！私出たいです！」
「発目さん……頑張って！」
（ごめんなさい、オールマイト……）
「うっ、うっうっ……はづめぢゃん！がんばっでね!!」
「我らの思いも背負って戦え……それが突き進む者の使命。」

「鉄哲！お前はＢ組最後の希望だ！頑張れよ！」
「おう！」
『……よし！改めてトーナメントの発表だァ！ちょっと組み合わせが変わったけど気にすんな！さぁいくぜぇ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』
「「「「オッケェェェェェ!!」」」」

１回戦
蛙吹　対　心操
瀬呂　対　轟
上鳴　対　峰田

サムス　対　発目

芦戸　対　青山
飯田　対　八百万
切島　対　鉄哲
障子　対　爆豪

（ふむ……私はサポート科と対戦するのか……）

蛙吹　対　心操

「それではァ？始めっ！」
「ケロッ！」ベローーン！
「ぐぅ！おい！いきなりやるなんて卑怯だぞ！」
速攻を決めた蛙吹、それを心操が個性で逆転を狙うが、予め尾白にタネを教えられていた蛙吹はそれを無視。そのまま場外へと投げ飛ばした。
「心操君場外！蛙吹ちゃんの勝利！」

「……俺はいつもヴィラン向きの個性だって罵倒された。……お前も嗤えよ。ヴィラン向きの個性の奴がヒーロー目指してるって」
「……きっと貴方はヒーローになれる。それに、ヴィラン向きなんかじゃない。ヒーロー向きのいい個性よ。」
「……そうか。……ありがとうな」
（少しは心操ちゃんの心を変えられたかしら……）

上鳴　対　峰田

「無差別１４０万Ｖ！」
「甘いぜ上鳴！もぎもぎ避雷針！」
上鳴が帯電したまま飛びかかって峰田を襲うが、峰田はもぎもぎを避雷針にして感電を回避する。
「うぇーーい……」
アホになっても最低限の知能は持ち合わせているようで、しっかりと峰田に攻撃をしようとするが、小さい峰田には当たらないような見当違いの方向を殴っているため、上鳴の拳は全て空を切る。
「放電した後はやっぱりアホだな上鳴！それっ！グレープラッシュ！」

峰田はもぎもぎを上鳴の身体中に貼り付けて地面に固定する。
「これは……上鳴君は戦闘の続行を不可能とみなします！よって峰田君の勝利！」
「しゃあああああ!!これで女の子のオッパイを触れるぜぇぇぇ！」